

令和4年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年

小学校、義務教育学校前期課程、特別支援学校小学部の第6学年の児童

中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校、特別支援学校中学部の第3学年の生徒

(3) 調査の内容

教科に関する調査

- ・ 小学校調査 国語、算数及び理科
- ・ 中学校調査 国語、数学及び理科

生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

- ・ 児童生徒に対する調査（児童生徒質問紙調査）
- ・ 学校に対する調査（学校質問紙調査）

(4) 調査の方式

悉皆調査

(5) 調査の実施日

令和4年 4月19日（火）

(6) 本市における調査実施学校数及び児童生徒数

小学校 17校 780名 中学校 8校 637名 北進小中学校を除く市内小中学校

* 学校質問紙調査の結果について

質問紙調査では、調査項目が変更となる場合も多いことから、次の4観点に沿って質問項目を抽出し、千歳市の状況を把握することにした。

千歳市学力向上検討委員会の学校への提言の取組状況や課題を把握する。

千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」の効果や改善に向けた課題を把握する。

千歳市教育委員会が重要課題として位置付けている「小中連携・一貫教育」の取組の状況や取組の充実に向けた課題を把握する。

児童生徒と学校の意識の違いを把握する。

2 教科に関する調査結果

(北海道教育委員会の分類方法による9段階)

相当高い	… 7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	… -1ポイント以下 -3ポイント未満
高い	… 5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	… -3ポイント以下 -5ポイント未満
やや高い	… 3ポイント以上5ポイント未満	低い	… -5ポイント以下 -7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	… 1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	… -7ポイント以下
同様	… ±1ポイント		

(1) 小学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
 全道：道内の全公立小学校 全国：国内の全公立小学校

小学校教科全体		国語	算数	理科
平均正答数	千歳市	8.6問/14問	9.3問/16問	10.5問/17問
	全道	9.0問/14問	9.8問/16問	10.7問/17問
	全国	9.2問/14問	10.1問/16問	10.8問/17問
平均正答率	千歳市	62%(61.5%)	58%(58.4%)	62%(61.7%)
	全道	64%(64.4%)	61%(61.1%)	63%(62.9%)
	全国	65.6%	63.2%	63.3%
全道との比較		ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)
全国との比較		やや低い	やや低い	ほぼ同様(下位)

平成31年度の調査から、「主として『知識』に関する問題」と「主として『活用』に関する問題」の区分を見直し、知識と活用力を一体的に調査する問題への変更が行われたが、内容的には従前の「主として『活用』に関する問題」であるB問題に極めて近いことから、平成30年度以前の領域別の分析については、過去のB問題の結果を用いて比較・検討することにした。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症に係る学校教育への影響等を考慮して本調査が実施されなかったことから、本年度を「今回」、令和3年度を「前回」、平成31年度を「前々回」としておさえ、経年変化を捉えることにした。

調査に準じ、問題を学習指導要領の内容(または領域)評価の観点、問題形式と分類し、区分別に集計している。各教科の領域は、学習指導要領の内容(または領域)内の区分とし、新たな領域は過去の同系統のデータを参考にすることとした。なお、従前と同じ名称の場合は過去のデータを関連づけて比較・検討しているが、領域間で移行した学習内容もあり、領域名が同じであっても同一の内容ではないことを付け加えておく。

国語については、全国を4.1ポイント下回り、全国と比較して前回の「ほぼ同様(下位)」から「やや低い」の段階となった。算数については、全国を4.8ポイント下回り、全国と比較して前回と同じく「やや低い」の段階となった。理科については、全国を1.6ポイント下回り、3年前の「やや低い」から「ほぼ同様(下位)」の段階となった。

国語については、前回、全国との差が2.3ポイントだったが、4.1ポイントに差が広がった。領域別では、「書くこと」が前回は上回り、全国との差を縮めた。他の領域は前回は下回り、全国との差が広がった。

算数については、前回、全国との差が3.6ポイントだったが、4.8ポイントに差が広がった。領域別では、「数と計算」が前回はやや上回り、全国との差を縮めた。他の領域は、前回は下回り、全国との差が広がった。

理科については、前回、全国との差が4.7ポイントだったが、1.6ポイントに差を縮めた。領域別では、「粒子」が全国を上回った。「エネルギー」「地球」は前回は上回り、全国との差を縮めた。「生命」は、前回はやや下回り、全国との差が広がった。

(2) 中学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
 全道：道内の全公立中学校 全国：国内の全公立中学校

中学校教科全体		国語	数学	理科
平均正答数	千歳市	9.1問/14問	6.6問/14問	9.8問/21問
	全道	9.6問/14問	6.9問/14問	10.3問/21問
	全国	9.7問/14問	7.2問/14問	10.4問/21問
平均正答率	千歳市	65%(65.1%)	47%(46.7%)	47%(46.6%)
	全道	69%(68.6%)	49%(48.9%)	49%(49.0%)
	全国	69.0%	51.4%	49.3%
全道との比較		やや低い	ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)
全国との比較		やや低い	やや低い	ほぼ同様(下位)

国語については、全国を3.9ポイント下回り、全国と比較し前回の「ほぼ同様(下位)」から「やや低い」の段階となった。数学については、全国を4.7ポイント下回り、全国と比較して前回と同じ「やや低い」の段階となった。理科については、全国を2.7ポイント下回り、全国と比較し「同様」から「ほぼ同様(下位)」の段階となった。

国語については、前回、全国との差が2.7ポイントだったが、今回は3.9ポイントに差が広がった。領域別では、「読むこと」が前回は上回り全国との差が縮めたが、他の領域は前回は下回り、全国との差が広がった。

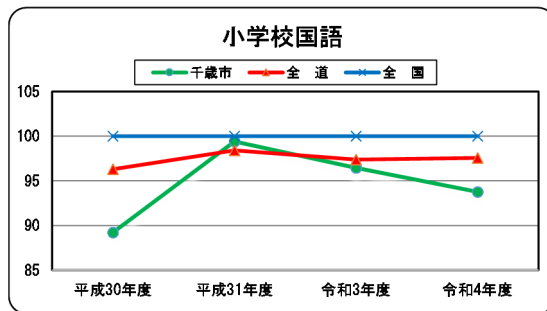
数学については、前回、全国との差を3.5ポイントだったが、今回は4.7ポイントに差が広がった。領域別では、「図形」が前回は上回り全国平均とほぼ同様になった。「関数」は、前回とほぼ同様だったが、「数と式」は激しく落ち込んだ。「データの活用」は、全国を下回った。

理科については、前回、全国と同様だったが、今回は全国を2.7ポイント下回った。領域別では、全領域が全国を下回った。特に、「生命」「地球」は全国との差が大きい。

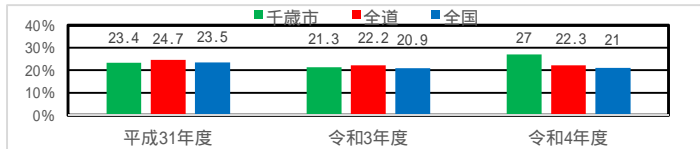
(3) 小学校国語

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

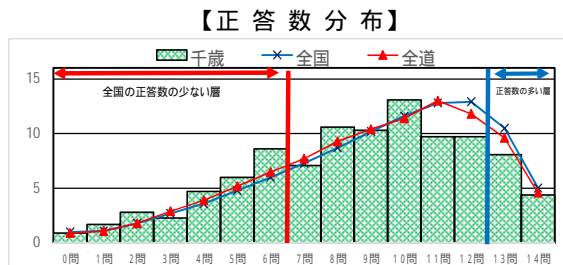
	平成30年度	平成31年度	令和3年度	令和4年度
千歳市	48.8	63.4	62.4	61.5
	89.2	99.4	96.4	93.8
全道	52.7	62.8	63.2	64.4
	96.3	98.4	97.4	98.2
全国	54.7	63.8	64.7	65.6
	100	100	100	100



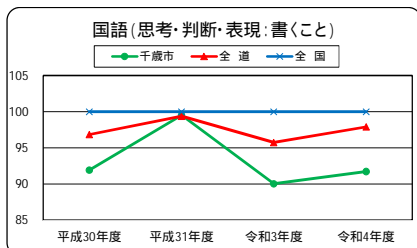
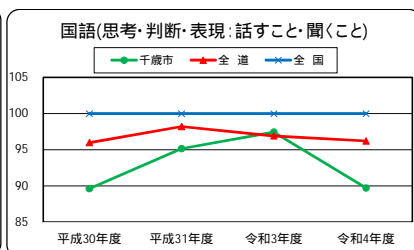
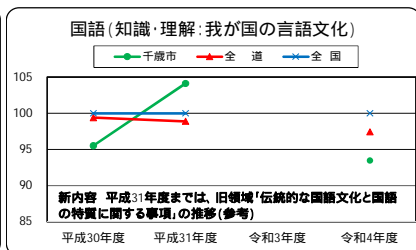
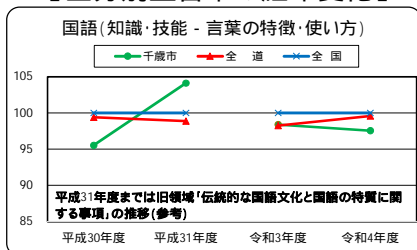
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



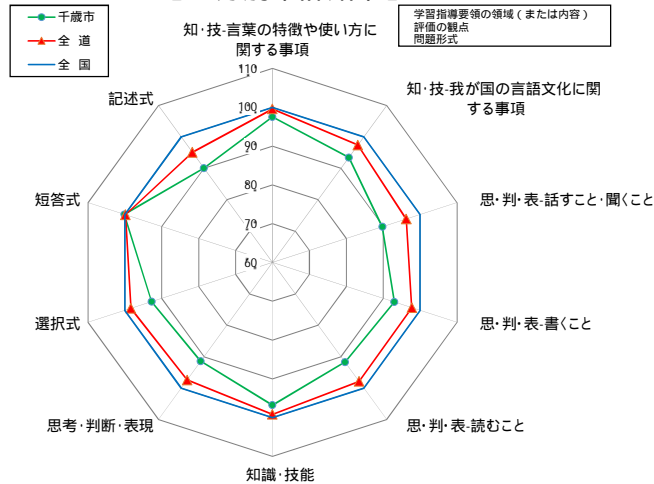
正答数の少ない層の割合は、全国より6ポイント高い状況で、今回はかなり高い。正答数の多い層の割合は、全国より低い状況となっている。



【区分別正答率の経年変化】



【区分別集計結果】



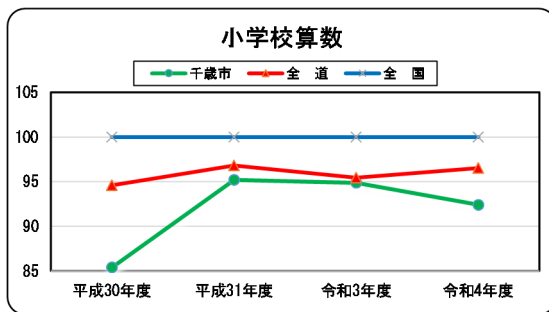
「書くこと」は前回の成績を上回ったが、新内容を除く他の区分は前回を下回った。全領域が全国を下回り、国語全体の平均正答率は、全国よりやや低い結果となった。

「言葉の特徴や使い方に関する事項」は、「親しむ」などの漢字を正しく使うことが全国の正答率を上回ったが、相手とのつながりをつくる言葉の働きを捉えることに課題があり、前回を下回った。「我が国の言語文化に関する事項」では、相手の読みやすさを考えて行の中心に文字の中心をそろえて書くことの捉えに課題がある。「話すこと・聞くこと」は、話し合いにおいて質問の意図を捉える問題、立場や意図を明確にしなが考えをまとめる問題の正答率が低く、前回を大きく下回り、4年前とほぼ同様の状況に戻った。(全国を100とした指数で4年前88.1、前回101.5、今回89.7)「書くこと」は、文章全体の構成や書き表し方などに着目して文や文章を整えることに課題がある。「読むこと」は、登場人物の行動や気持ちなどについて叙述を基に捉える問題、人物像や物語などの全体像を具体的に想像して表現の効果を考える問題の正答率が低く、領域全体の低下に影響した。問題形式においては、正しい漢字を書く「短答式問題」の正答率は全国と同様であるが、「選択式問題」「記述式問題」はいずれも全国の正答率との差が大きい。学習指導にあたっては、登場人物の行動や気持ちなどについて叙述を基に捉える活動、互いの立場を明確にしなが計画的に話し合い、自分の考えをまとめる活動などの充実が求められる。

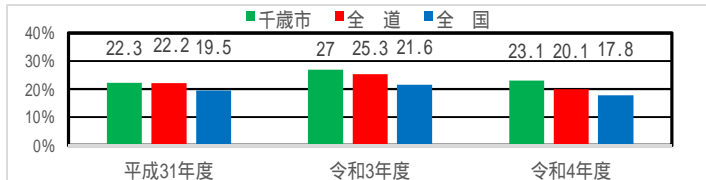
(4) 小学校算数

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

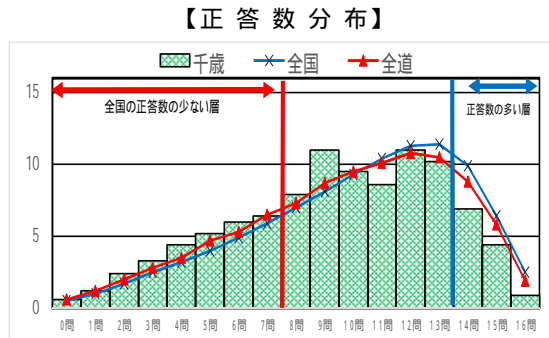
	平成30年度	平成31年度	令和3年度	令和4年度
千歳市	44	63.4	66.6	58.4
	85.4	95.2	94.9	92.4
全道	48.7	64.5	67.5	61.1
	94.6	96.8	95.4	96.7
全国	51.5	66.6	70.2	63.2
	100	100	100	100



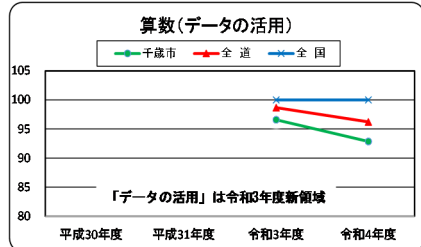
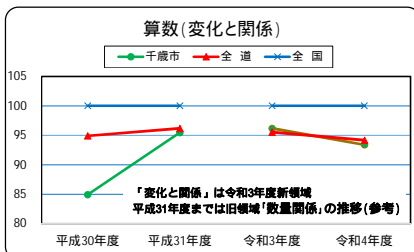
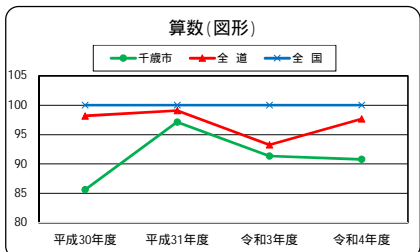
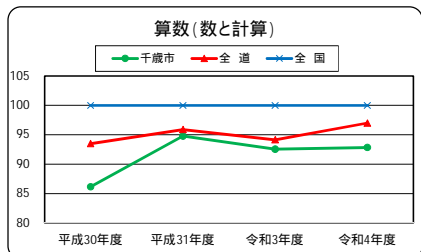
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



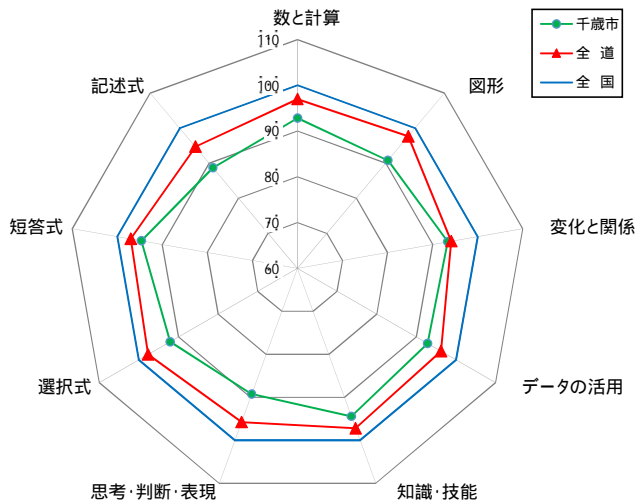
正答数の少ない層の割合は、全国より5.3ポイント高い状況で、前回とほぼ同様である。正答数の多い層の割合は、全国より低い状況となっている。



【区別別正答率の経年変化】



【区別別集計結果】



「数と計算」は前回とほぼ同様だったが、他の領域は前回は下回った。算数の平均正答率は全国との差が開き、全国より「やや低い」状況となった。

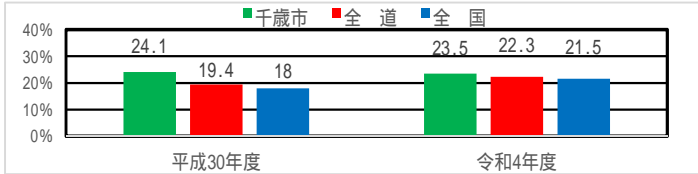
「数と計算」では、二つの数の最小公倍数を求める問題、加法と乗法の混合算でポイント数を求める問題の正答率が低く、領域全体の成績に影響した。「図形」では、プログラムを使って正三角形や平行四辺形などを描くとき、図形を構成する要素に着目して命令を書き直す問題、示されたプログラムで描くことができる図形を捉える問題などの正答率が低かった。「変化と関係」では、伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて未知の数量を求める問題の正答率が低く、領域全体の低下に影響した。「データの活用」は、分類整理されたデータの特徴を捉え考察する問題の正答率が低く、前回は下回った。問題形式においては、「選択式問題」「短答式問題」「記述式問題」の正答率がいずれも全国平均に達していない状況である。学習指導にあたっては、日常生活の問題を解決するために数量の関係を式に表したり、式を読み取ったりする活動、図形の意味や性質を基に作図の仕方を考え、発展的に考察する活動などの充実が求められる。

(5) 小学校理科

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

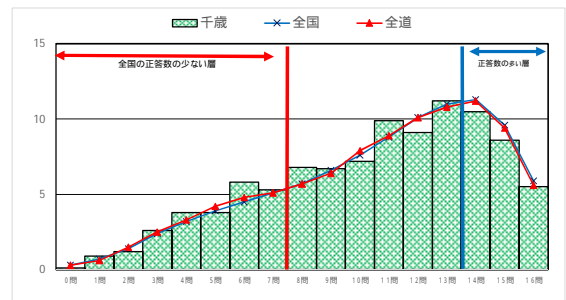
	平成30年度	令和4年度
千歳市	55.6	61.7
	92.2	97.5
全道	58.8	62.9
	97.5	99.4
全国	60.3	63.3
	100	100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

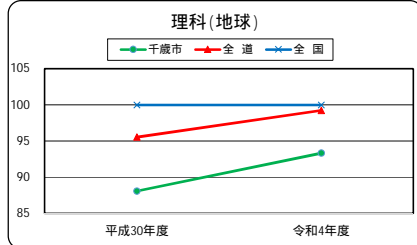
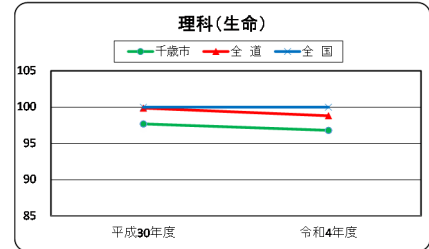
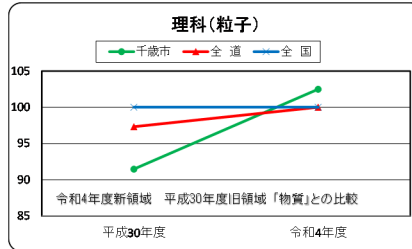
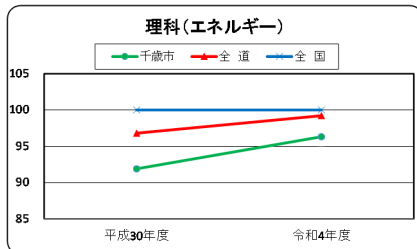


正答数の少ない層の割合は、全国より2ポイント高い状況で、前回より差を縮めた。正答数の多い層の割合は、全国とほぼ同様の状況となっている。

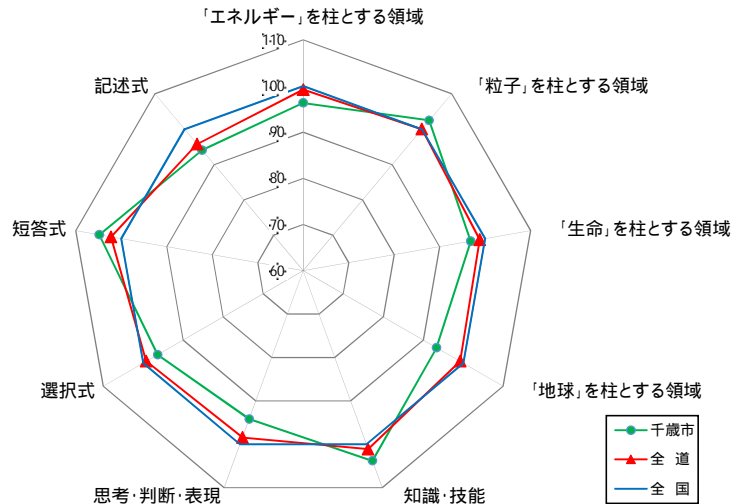
【正答数分布】



【区別別正答率の経年変化】



【区別別集計結果】



「粒子」は全国を上回った。「エネルギー」「地球」が前回は大きく上回ったが、「生命」はやや低下した。理科の平均正答率は前回は大きく上回り、全国と「ほぼ同様(下位)」の状況となった。

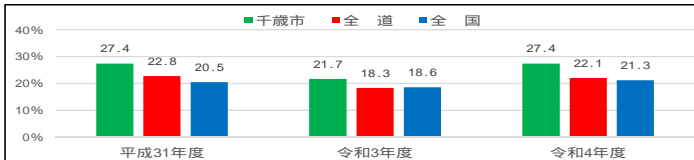
「エネルギー」では、日光の直進性にかかわる問題、実験の方法を見直して新たに手順を追加する問題の正答率が全国とほぼ同様になるなど、領域全体の回復に影響した。「粒子」では、メスシリンダーの名称や正しい使い方にかかわる問題の正答率が全国平均を大きく上回り、領域全体を押し上げ、調査以来最高の成績となった。「生命」は、昆虫の成長と食性の表から問題を見出すことに課題があり、領域全体の成績に影響した。「地球」は、前回は上回り全国との差を縮めたが、晴れた日と曇った日の気温のグラフから冬の天気についてまとめることなどに課題がある。問題形式においては、「短答式問題」の正答率が全国を上回ったが、「選択式問題」「記述式問題」の正答率がいずれも全国平均に達していない状況である。学習指導にあたっては、観察、実験などの結果について自分や他者の気づきを基に分析して、解釈し、問題を見いだす活動、主体的な問題解決を通して得た学習の成果を日常生活とのかかわりの中で捉え直し、より深く知識・理解を獲得する活動の充実が求められる。

(6) 中学校国語

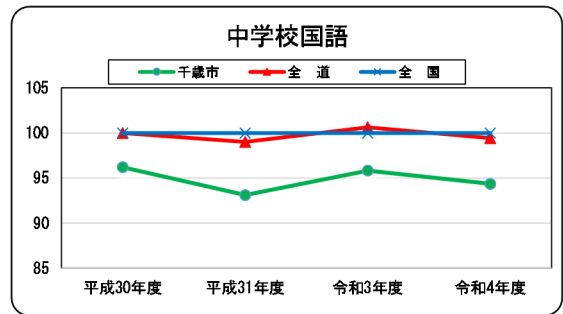
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成30年度	平成31年度	令和3年度	令和4年度
千歳市	58.9	67.8	61.9	65.1
	96.2	93.1	95.8	94.3
全道	61.2	72.1	64.5	68.6
	100	99	100.6	99.4
全国	61.2	72.8	64.6	69
	100	100	100	100

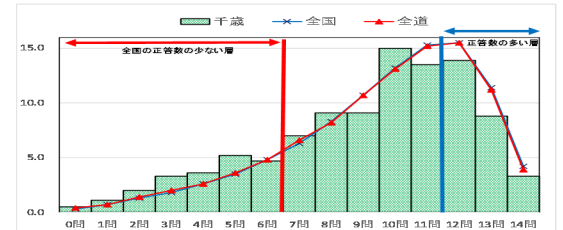
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



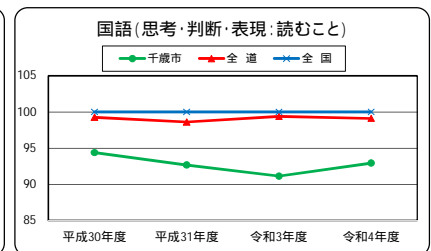
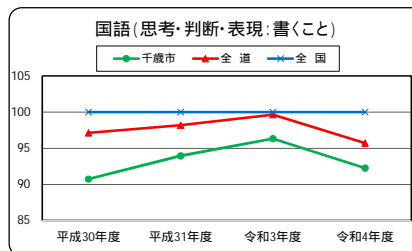
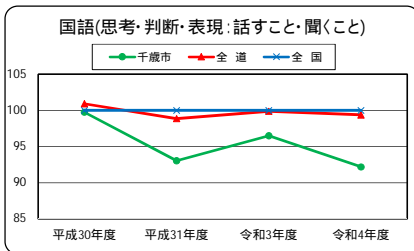
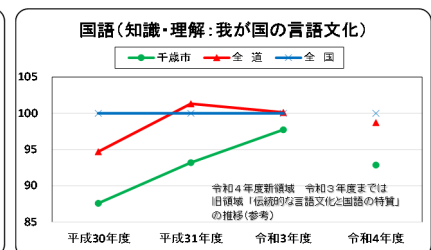
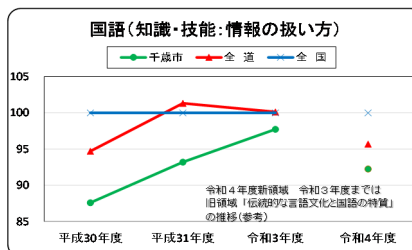
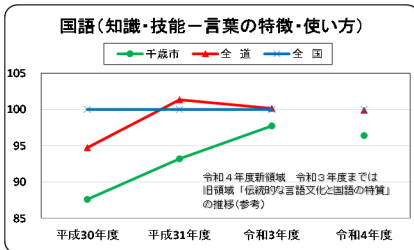
正答数の少ない層の割合は、全国より6.1ポイント高い状況で、今回はかなり高い。正答数の多い層の割合は、全国より低い状況となっている。



【正答数分布】



【区別別正答率の経年変化】

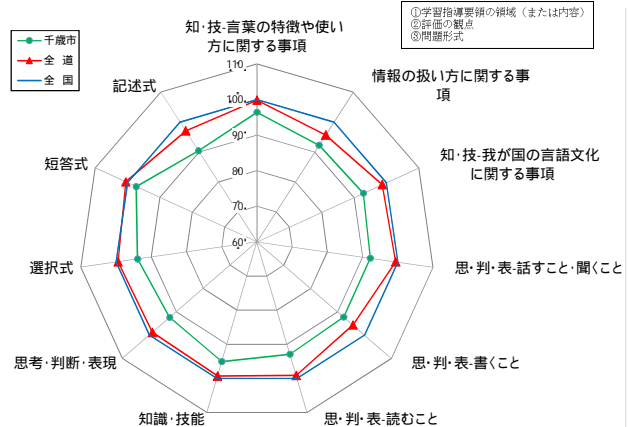


【区別別集計結果】

「読むこと」が前回は上回り、「話すこと・聞くこと」「書くこと」は下回った。知識及び技能の3区分は、いずれも全国を下回った。国語の平均正答率は全国との差が開き、全国より「やや低い」状況となった。

「言葉の特徴や使い方に関する事項」は、事象や行為、心情を表す語句の理解が全国と同様だったが、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することなどに課題があり、全国を下回った。「情報の扱い方に関する事項」は、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことに課題がある。

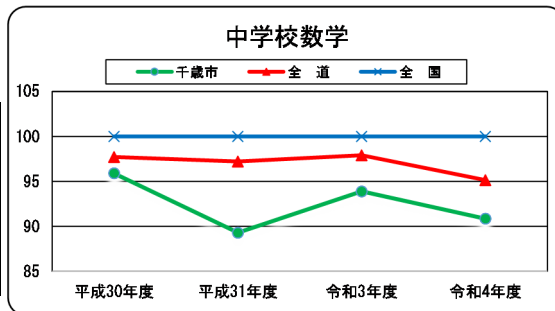
「我が国の言語文化に関する事項」は、行書の特徴を踏まえた書き方や漢字に調和した仮名の書き方の捉えに課題がある。「話すこと・聞くこと」では、話の進め方のよさを捉える問題などの正答率が低く、領域全体の成績に影響した。「書くこと」では、考えが伝わるように根拠を明確にして文章を書く問題の正答率が低かった。「読むこと」は、前回は上回ったものの場面と場面、場面と描写などを結び付けて、内容を解釈することに課題がある。問題形式においては、正しい漢字を書く「短答式問題」の正答率が全国をやや下回る状況であるが、「選択式問題」「記述式問題」はいずれも全国の正答率との差が大きい。学習指導にあたっては、情報同士の結び付きに注意しながら聞く活動、話の展開を捉えて内容を解釈し、作品を読み味わう活動などの充実が求められる。



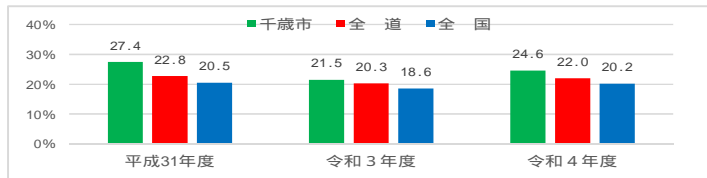
(7) 中学校数学

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

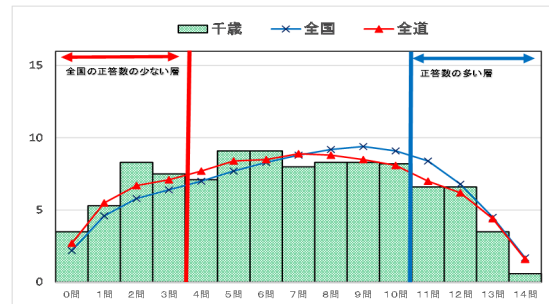
	平成30年度	平成31年度	令和3年度	令和4年度
千歳市	45	53.4	53.7	46.7
	95.9	89.3	93.9	90.9
全道	45.8	58.1	55.9	48.9
	97.7	97.2	97.9	95.1
全国	46.9	59.8	57.2	51.4
	100	100	100	100



【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

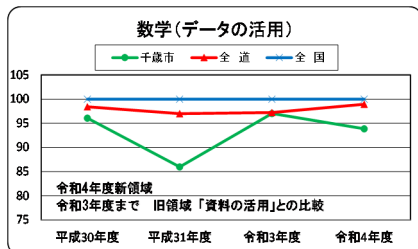
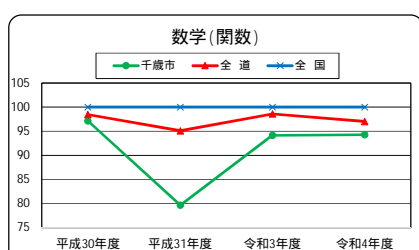
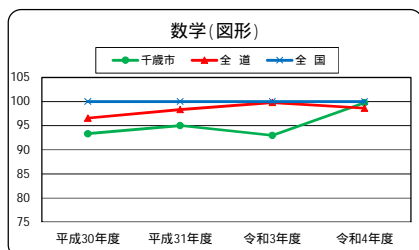
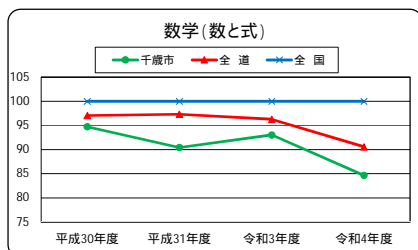


【正答数分布】

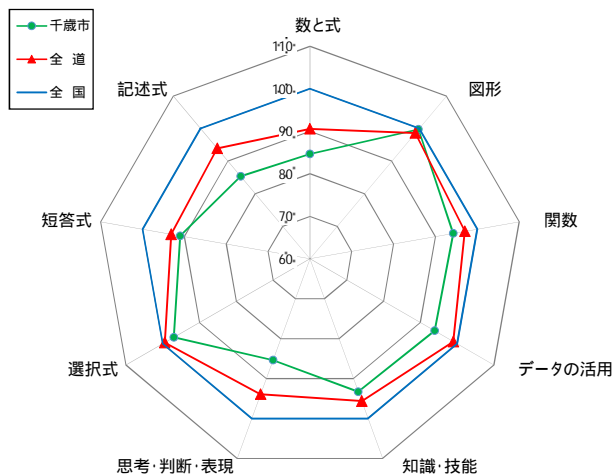


正答数の少ない層の割合は、全国より4.4ポイント高い状況で、前回よりも差が開いた。正答数の多い層の割合は、全国より低い状況となっている。

【区別正答率の経年変化】



【区別集計結果】



「図形」が前回は大きく上回り、「関数」は前回とほぼ同様で、「数と式」は大きく低下した。「図形」は過去10年間で最高の成績となったが、数学全体の平均正答率は全国との差が開き、全国より「やや低い」状況となった。

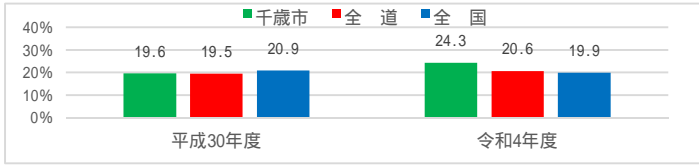
「数と式」では、自然数を素数の積で表す問題、目的に応じて式を変形して、その意味を読み取り、事柄が成り立つ理由を説明する問題の正答率が低く、領域全体の低下に影響した。「図形」では、命題や推測した事柄について考察し、常に成り立つとは限らないことを説明する反例の問題の正答率が全国を上回り、領域全体の成績を押し上げた。「関数」では、与えられたグラフをもとにして考える問題の正答率が低かった。過去2回、全国を正答率を上回っていた「変化の割合が2である一次関数の関係を表した表を選ぶ」問題については、今回全国を下回った。(全国を100とした指数で H26A 102、H29A 106、R4 93)「データの活用」は、多数の観察や多数回の試行によって得られる確率の意味を理解する問題の正答率が低かった。問題形式においては、「選択式問題」「短答式問題」「記述式問題」の正答率がいずれも全国平均に達していない状況である。学習指導にあたっては、結論が成り立つための前提を捉え、見いだした事柄を数学的に表現する活動、目的に応じてデータを収集して処理し、その傾向を読み取って批判的に考察し判断することを通して、統計的に問題解決する活動などの充実が求められる。

(8) 中学校理科

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

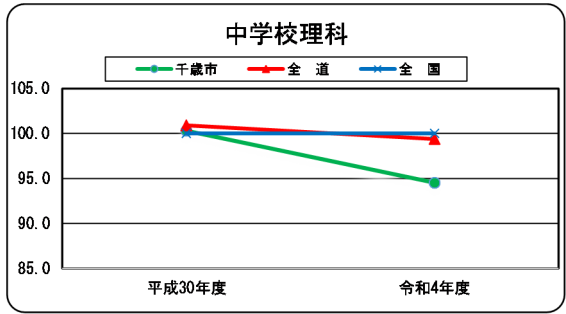
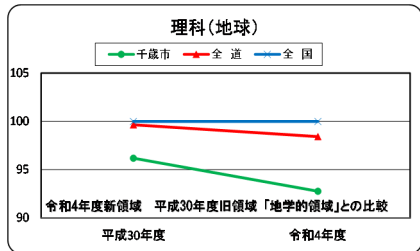
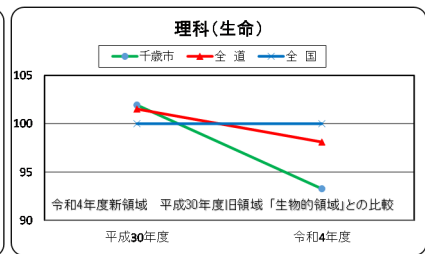
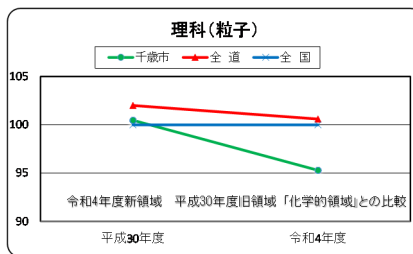
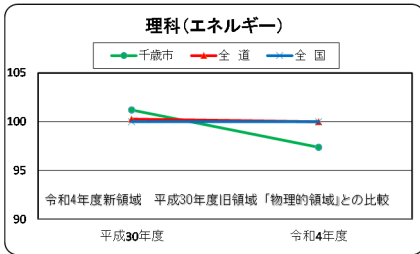
	平成30年度	令和4年度
千歳市	66.3 100.3	46.6 94.5
全道	66.7 100.9	49 99.4
全国	66.1 100	49.3 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

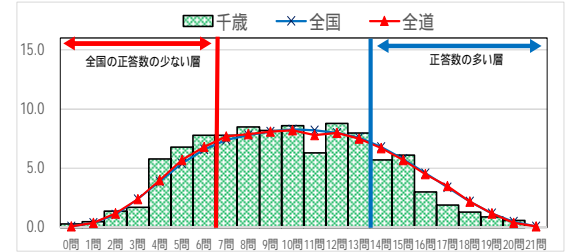


正答数の少ない層の割合は、全国より5.4ポイント高い状況で、前回よりも差が開いた。正答数の多い層の割合は、全国より低い状況となっている。

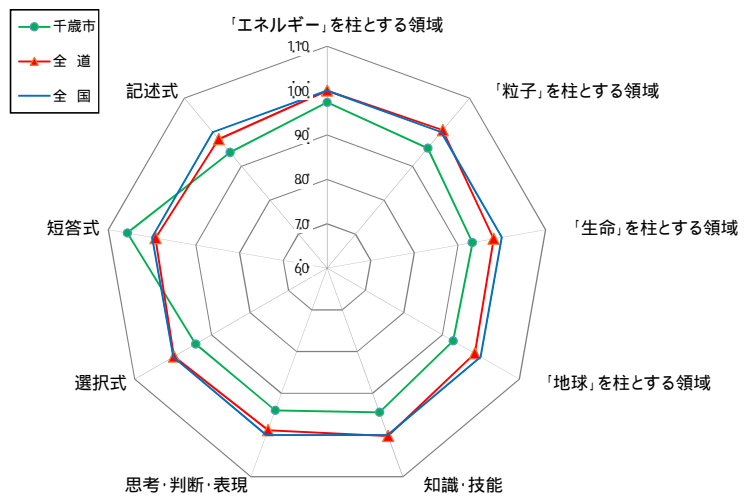
【区分別正答率の経年変化】



【正答数分布】



【区分別集計結果】



全領域が全国を下回った。理科の平均正答率は「全国とほぼ同様（下位）」の状況になった。特に、「生命」「地球」は全国との差が大きい。

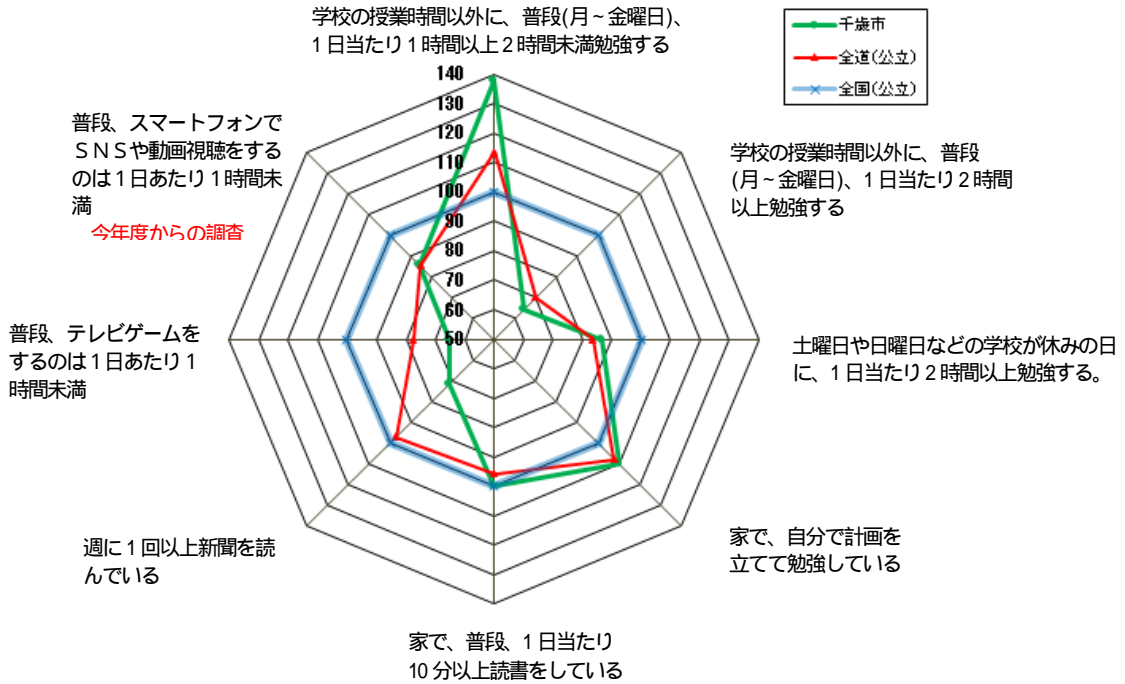
「エネルギー」では、モデルを使った実験において変える条件と変えない条件を適切に設定した実験操作にかかわる問題の正答率が全国とほぼ同様であるが、物体に働く重力とつり合う力を矢印とその力の説明を選ぶ問題の正答率が低く、領域全体の成績に影響している。「粒子」では、水素を燃料として使うしくみの例の全体を働かせるおおもとして必要なものを答える問題の正答率が全国を上回ったが、液体から気体への状態変化によって温度が下がる現象と身近な現象を結びつけて考えることなどに課題がある。「生命」は、予想や仮説と異なる実験の結果が出る場合、その意味することや考えられる可能性について考え、実験の操作や条件制御の不備の可能性を指摘することなどに課題があり、領域全体の成績に影響した。「地球」は、ルートマップと露頭のスケッチを関連付け、地層の傾きを解釈することなどに課題がある。問題形式においては、「短答式問題」の正答率が全国を上回ったが、「選択式問題」「記述式問題」の正答率がいずれも全国平均に達していない状況である。学習指導にあたっては、地層の傾きを主として時間的・空間的な視点で捉え、分析して解釈する活動、観察・実験の操作や条件の制御などの探究の方法を検討し、探究の過程の見通しをもつ活動の充実が求められる。

3 児童生徒質問紙の結果

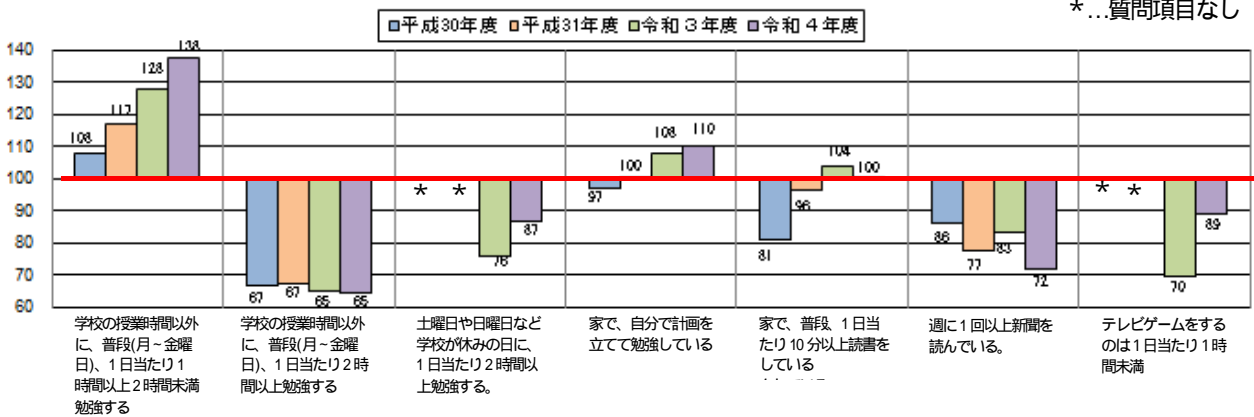
令和4年度の調査では、小学校と中学校の質問項目が同じである。国語の質問項目が減り、4年ぶりに理科の項目が復活した。国語と理科については、同様の質問項目で取り上げることにした。算数・数学については、昨年度までの質問項目から若干の変更があったため、今年度の全ての質問項目を取り上げた。

また、ICTを活用した学習状況についての質問項目が増えていたが、本市は、今年度で「一人1端末」の整備が完了するため、次年度以降で取り上げることにした。

小学校学習習慣・生活習慣



過去4年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)



家庭学習習慣や読書習慣が身につつつある

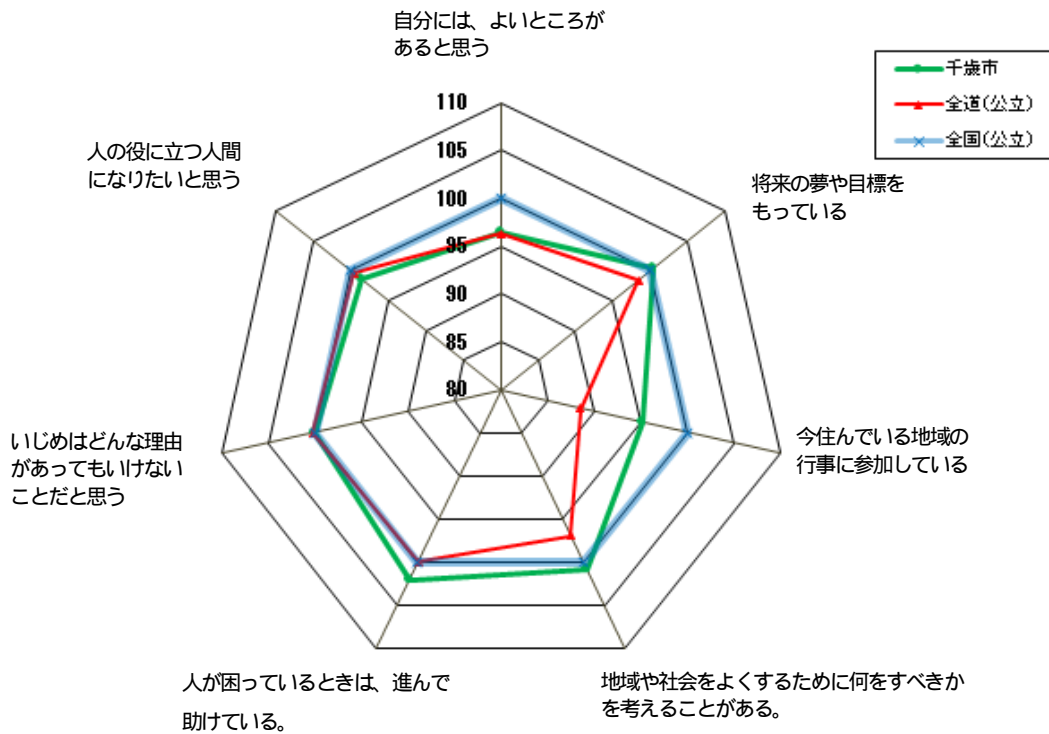
「計画的に家庭学習をする」児童が増え「普段、1時間以上2時間未満勉強する」児童はかなり増加傾向にあり、各学校が取り組んできた「学年×10分+10分の家庭学習」が定着している状況が見られる。しかし、「2時間以上学習する」児童が全国と比較して少なかったり、「1時間未満の学習時間」の児童が4割近くいたりするので、学習時間を全体的に増やす取組を全市的に展開していくことが大切である。

学校における読書習慣の形成が進み、「家庭における読書習慣」も定着しつつある。「新聞を読む習慣」については減少傾向にあるため、学校に常設するなどの工夫も必要である。

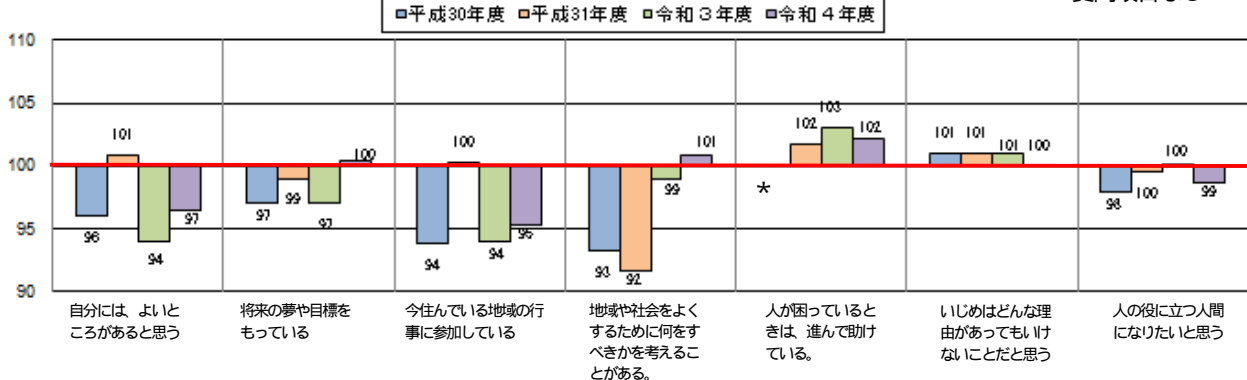
1日あたり1時間以上ゲームをしたり、スマホ等でSNSや動画視聴をしたりする児童の割合は、減少傾向にあるが、全国をまだ大きく上回っている。今後も、さらに家庭と連携して、アウトメディアの取組を進める必要

がある。

小学校自己有用感・規範意識



過去4年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す) *...質問項目なし



自己有用感・地域との関わりは向上傾向にあり、規範意識も安定している

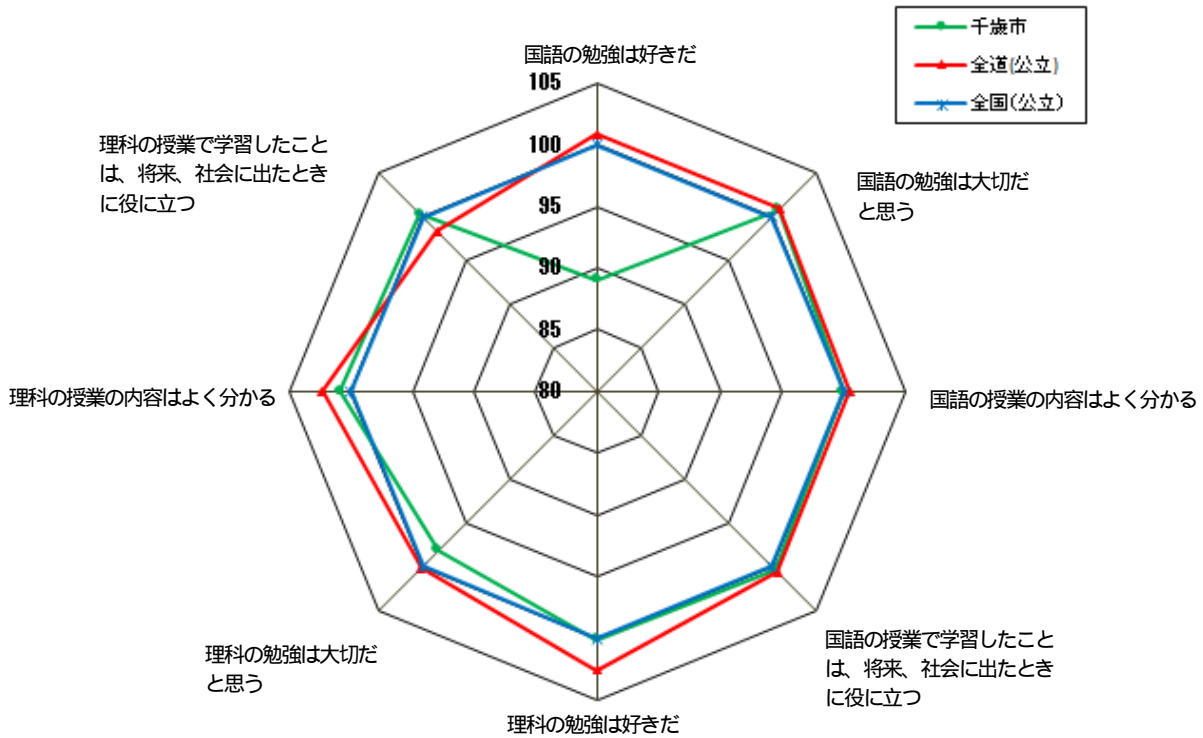
自己有用感については、「自分にはよいところがある」と回答した児童の割合は、前回よりも上回っているが、全国と比較するとまだ低い状況にある。「将来の夢や目標を持っている」児童が全国並みになったのは、キャリア教育の導入の成果である。地域との関わりについては、地域行事に参加している児童の割合は全国を下回っているが、増加傾向にある。「地域社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」については、全国を上回った。全体的に、周囲とのかかわりの低下がみられる社会状況に影響を受けながらも、学校や家庭の配慮した取組が進められた成果が見られる。

他者理解の、「人が困っているときは、進んで助けている」「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」「人の役に立つ人間になりたいと思う」についても全国とほぼ同様となっている。道徳の授業改善や学級指導の充実が、この結果に結びついていると考えられる。「いじめを許さない」ことについては、さらに高みを目指していく必要がある。

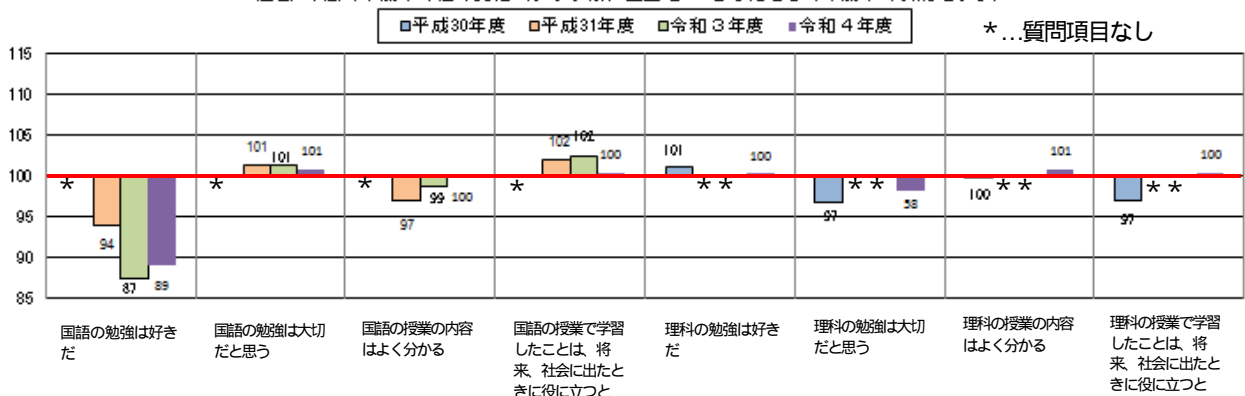
今後もハイパーQI検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、「学級生活満足群80%以上」という目標に向けて、学級満足度を高める学級経営を推進し、規範意識や自己有用感を高め、思いやりの心を育

てる取組を展開していくことが大切である。

小学校国語・理科



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



「国語の勉強が好きだ」は全国より低い状況であるが、向上傾向にある

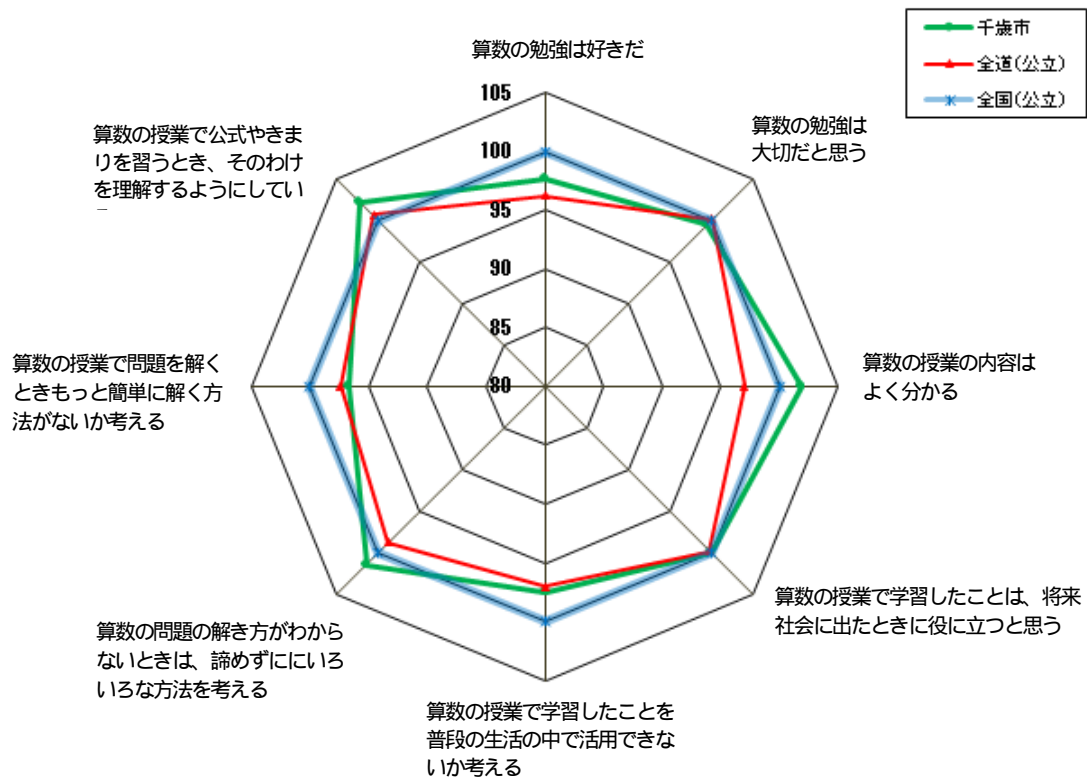
国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強は大切だ」「国語の授業の内容はよく分かる」「将来役に立つ」と回答した児童の割合が全国とほぼ同様となっている。一方、「国語の勉強は好きだ」は、全国よりかなり低いが、向上傾向にある。

本市では、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が進んでおり、学習に対する児童の意識も高まりつつある。各学校において、児童の実態を分析し、デジタル教科書や学校図書館の効果的な活用と併せて、国語科等で言語活動の充実に取り組み、児童の関心・意欲・態度を高めている成果が、徐々にあらわれてきている。

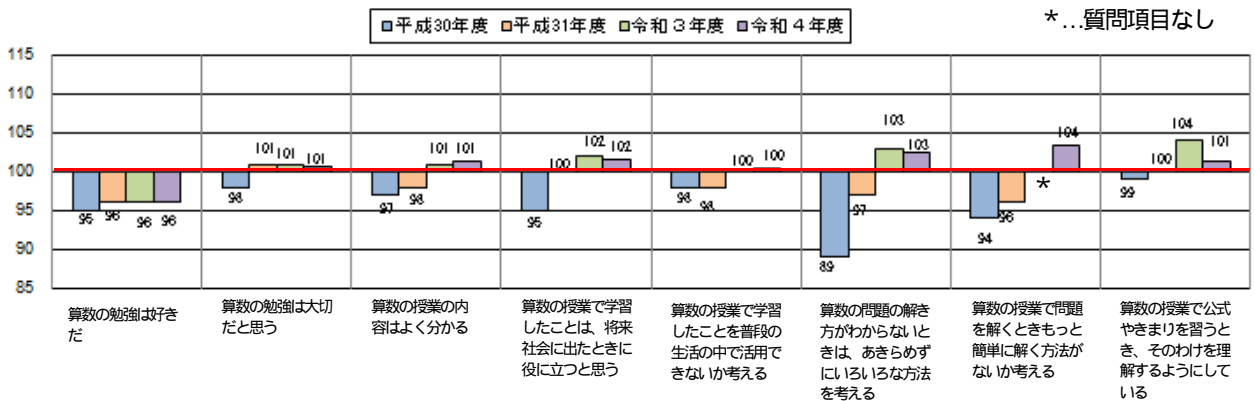
理科は全国とほぼ同じ状況にある

理科に対する関心・意欲・態度に関しては、全国とほぼ同様である。理科の教科担任制も徐々に進んでおり、理科のおもしろさや楽しさを体感させながら知識・理解を深める授業改善が進んでいる。

小学校算数



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



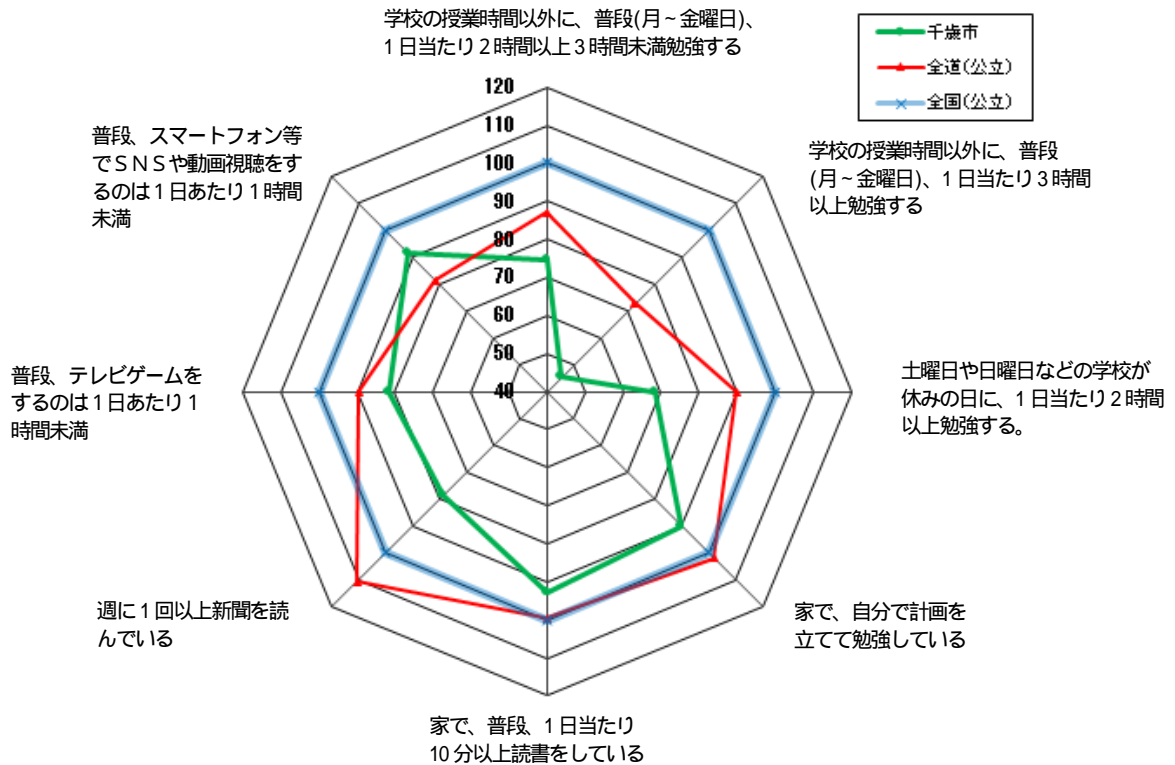
「算数の勉強が好きだ」はやや低い状況が続いているが、ほぼ全ての項目で前を上回っている

算数に関する関心・意欲・態度に関しては、「算数の勉強が好き」と回答した児童の割合は、前回同様全国を下回っているが、「算数の勉強は大切」「授業の内容はよく分かる」「授業で学習したことは将来役に立つ」と回答した児童の割合が全国を上回っており、算数の有用性を感じる児童が増えている。

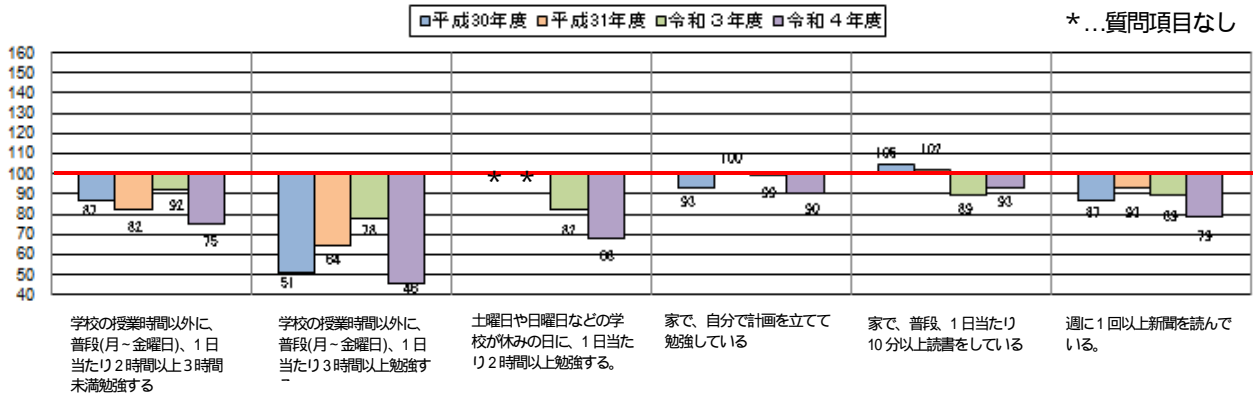
算数の学び方については、「授業で学習したことを生活の中で活用できないか考える」「解き方がわからないときは、あきらめずに考える」「問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」「公式やきまりを習うときそのわけを理解するようにしている」と回答した児童が全国を上回っており、各学校の主体的な学びに対する取組の成果が見られる。

今後も、学習支援員を活用した習熟度別少人数指導のよさを生かし、主体的に問題の解決に取り組む授業を工夫し、算数に対する関心・意欲・態度を一層高め、「算数が好き」な児童を育てていくことが大切である。

中学校学習習慣・生活習慣



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



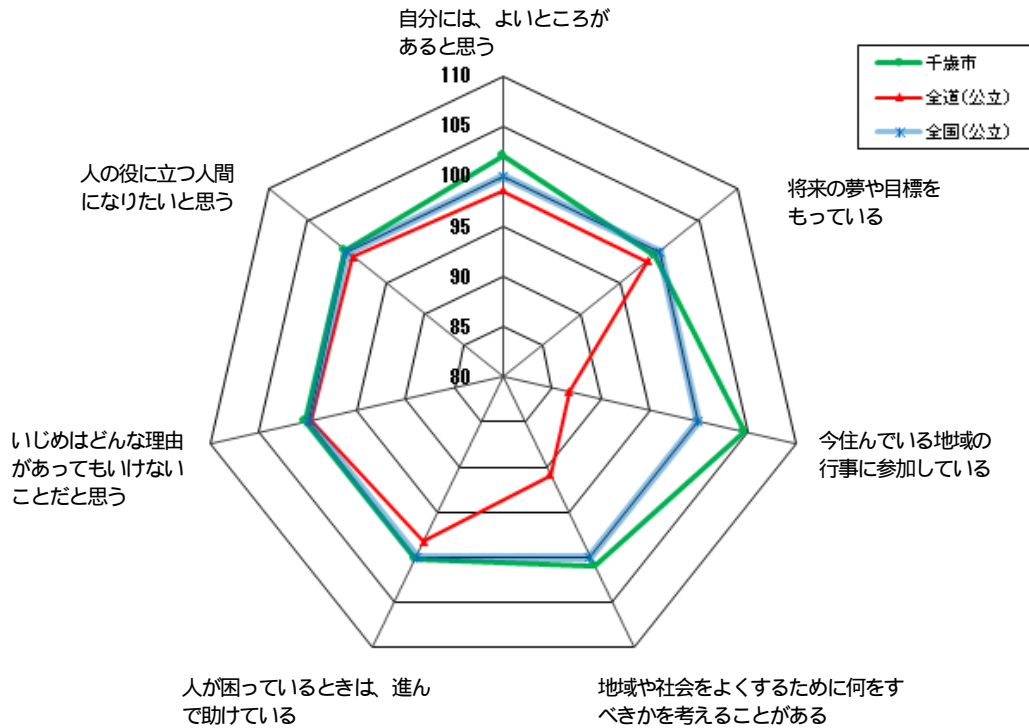
家庭での学習時間が少ない状況が続いている

家庭での学習時間については、前回を下回った。全国よりもかなり低く、家庭での学習時間を増やす取組を全体的に展開していく必要がある。「自分で計画を立てて勉強している」生徒の割合も減少傾向にある。各学校では、家庭での学習時間を増やすため、自ら学習の計画を立てる機会を設け、生徒の努力を積極的に認め励ます取組を進めているが、二極化が進んでいると考えられる。さらに、主体的に学習しようとする態度を育む必要がある。

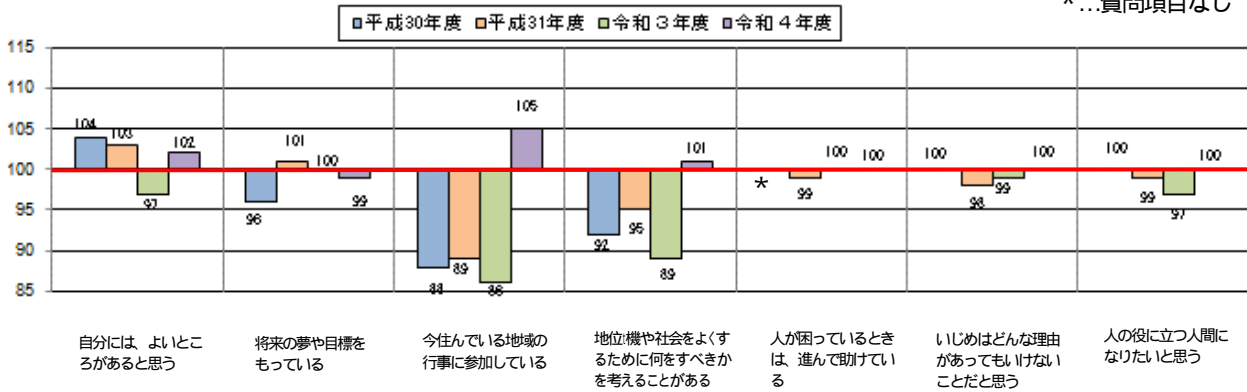
千歳市の重要な課題である活用力を高めるためには、複数の資料を関連付けて読み取ったり、情報を比較検討したりする能力が必要となる。新聞を読むことは、このような能力を高める効果があり、読書についても「全ての時間を勉強に費やすより、いくらかの時間を読書に割いた方が教科の学力が高い」ことが確認されている。本年度の調査では、「1日に10分以上、読書をしている」「週に1回以上新聞を読む」生徒の割合は全国を下回っており、大きな課題となっている。

1日あたり1時間以上ゲームをしたり、スマホ等でSNSや動画視聴を1時間以上したりする生徒の割合は、全国を上回っている。家庭と連携して、アウトメディアの取組を進める必要がある。

中学校自己有用感・規範意識



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



自己有用感・地域との関わりは上昇傾向にあり、規範意識も安定している

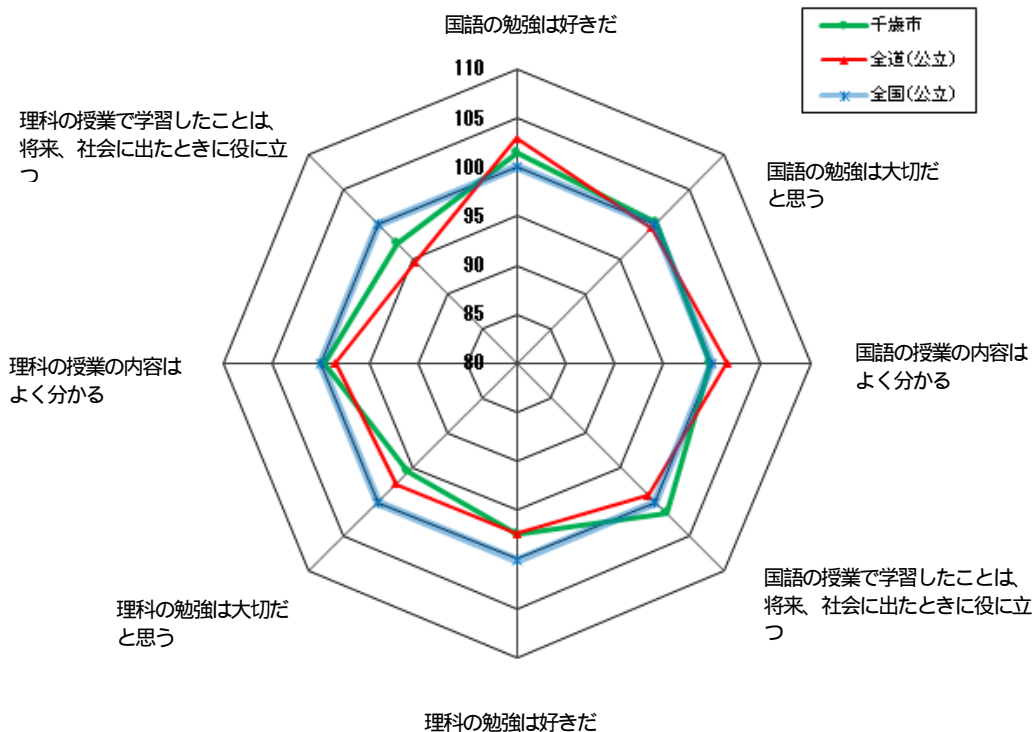
自己有用感については、「自分にはよいところがある」と回答した生徒の割合は、前回よりも上回っている。地域との関わりについては、「地域行事に参加している」「地域社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」生徒の割合は全国を上回った。全体的に、周囲とのかかわりの減少がみられる社会状況に影響を受けながらも、学校や家庭の配慮した取組が進められた成果が見られる。

他者理解については、「人が困っているときは、進んで助けている」「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した生徒の割合は全国とほぼ同様のレベルを維持している。各学校の生徒会による主体的な「いじめ撲滅運動」等が、生徒の他者理解への意識を高め、成果となって表れている。

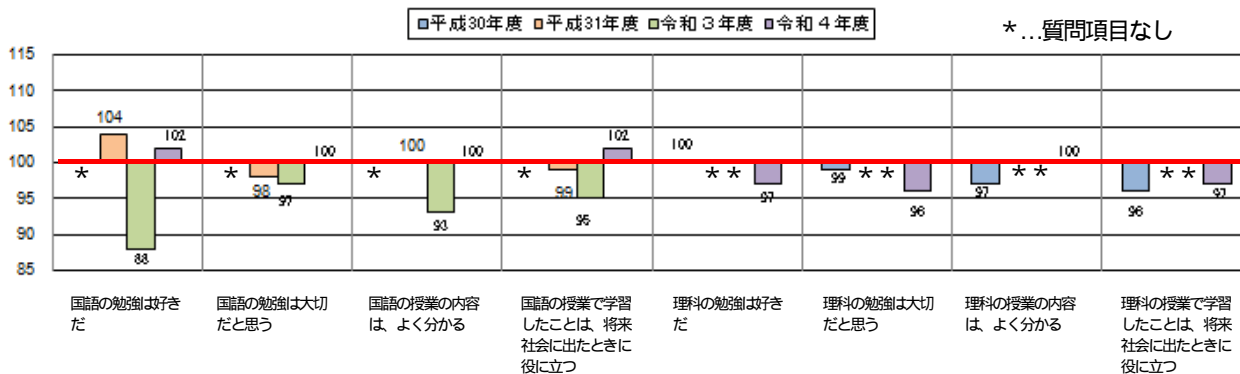
今後もハイパーQU検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、学級満足度を高める学級経

営を推進し、規範意識や自尊感情を一層高めていくとともに、他者を思いやる心を育てることが大切である。

中学校国語・理科



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



「国語の勉強が好きだ」が全国を上回っている

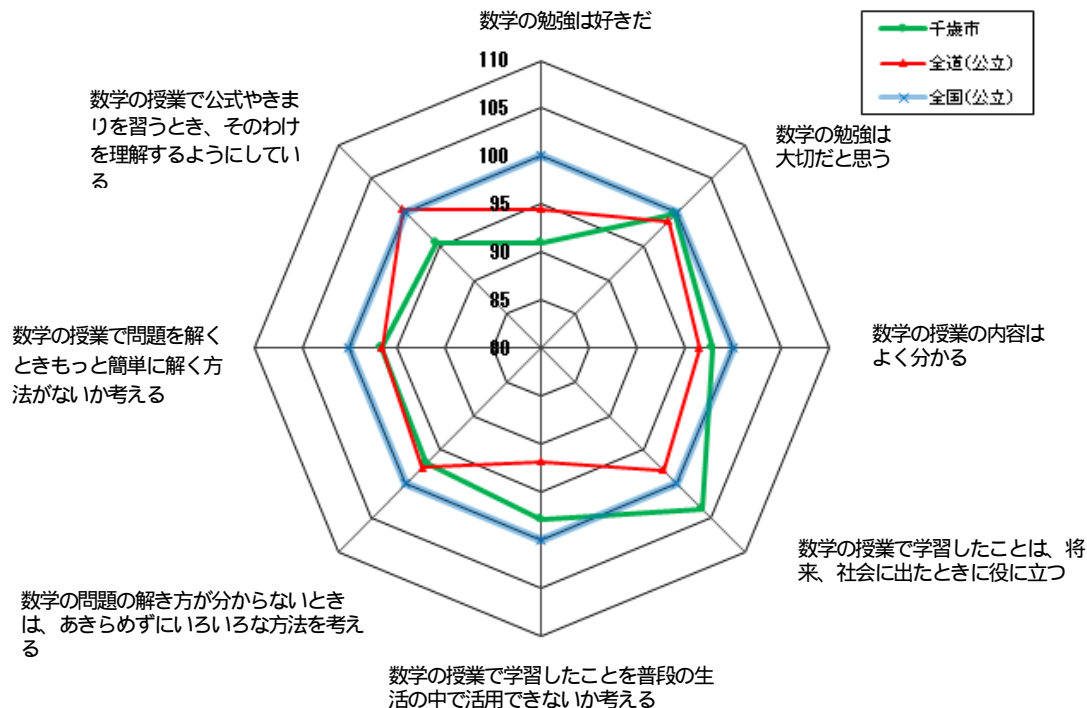
国語に対する関心・意欲・態度に関しては、「国語の勉強が好きだ」と回答した生徒の割合が増え、全国を上回った。また、「国語の勉強は大切」「国語の授業の内容はよく分かる」「国語の授業で学習したことは、将来役に立つ」についても全国並みとなり、各学校の取り組みの成果が見られる。

「理科の勉強が好きだ」はやや全国を下回っている

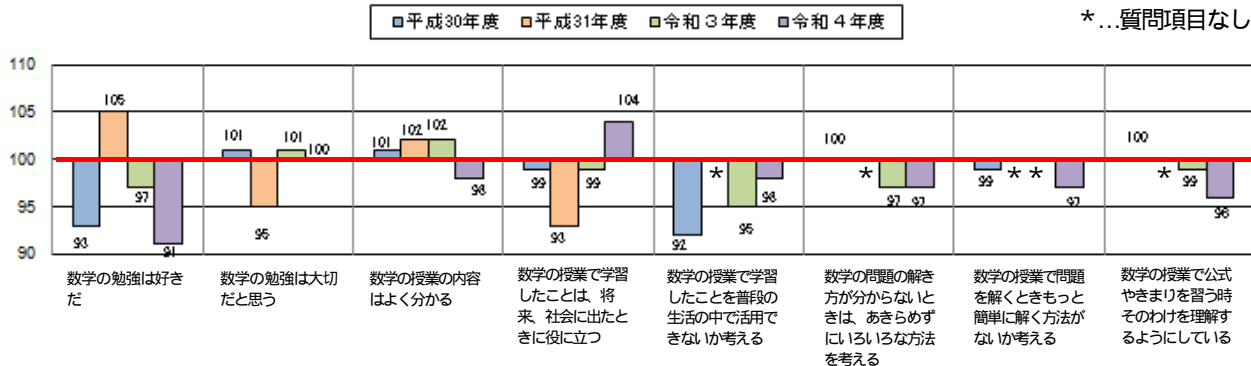
理科に対する関心・意欲・態度に関しては、おおむね全国並みではあるが、小学校と比較してやや低い傾向にある。

今後の改善の視点として、楽しくわかる理科の授業を目指して、ICTをさらに活用した授業改善を進めることで、個別最適化の学び、協働的な学びをさらに進めていくことが重要である。

中学校数学



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



数学好きの生徒は減少傾向、有用性を感じる生徒は増加傾向

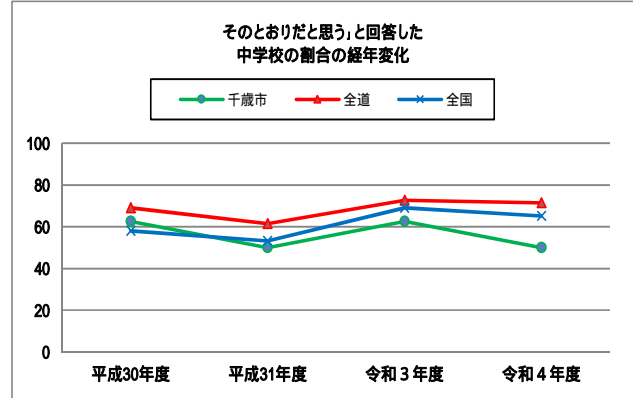
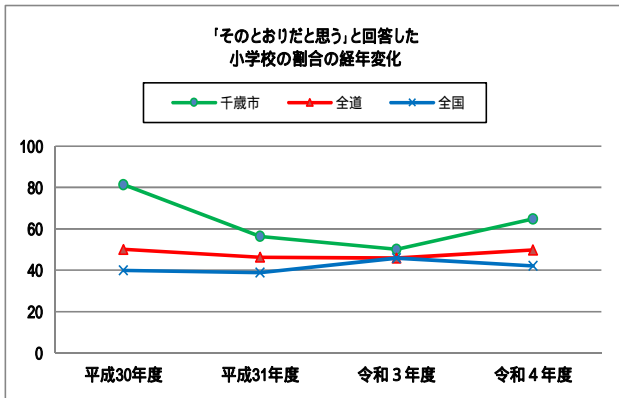
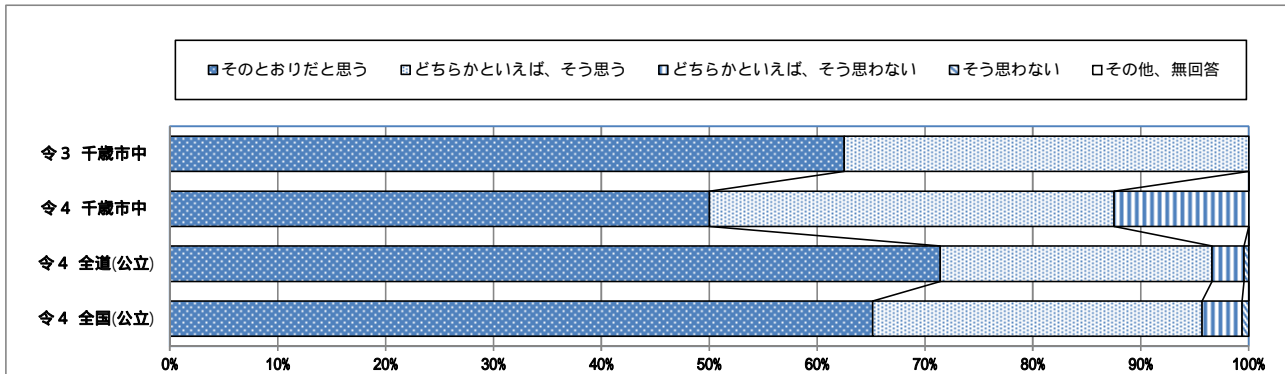
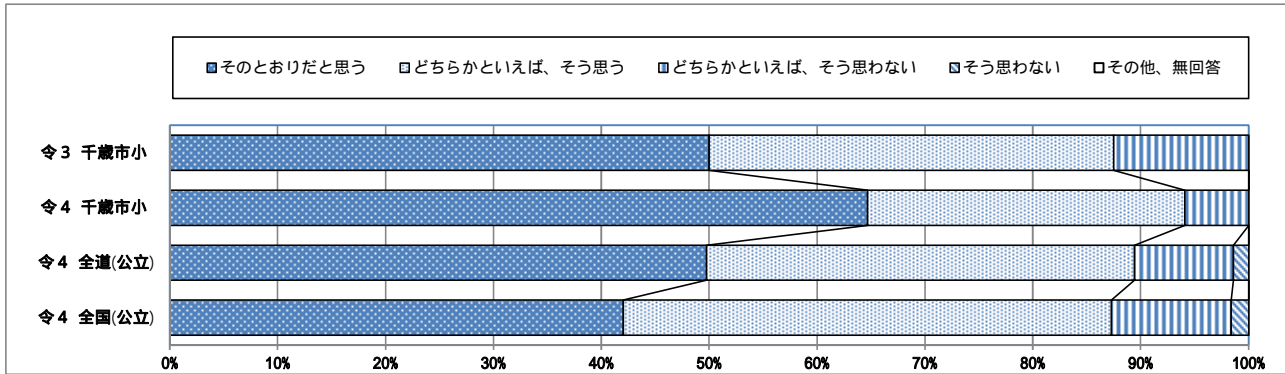
「数学が好き」と回答した生徒の割合は前回よりも減少し、全国を大きく下回った。「数学の勉強は大切」「授業の内容はよく分かる」と回答した生徒の割合は、前回はやや下回ったが、全国とほぼ同様となっており、数学の学習に有用性を感じている。「数学は将来社会に出たときに役に立つ」と回答した生徒の割合は、全国を上回った。

数学の学び方については、「授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」と回答した生徒が前回よりもやや増加している。「問題の解き方が分からないときは、あきらめずに考える」「問題を解くときもっと簡単に解く方法がないか考える」「公式や決まりを習う時そのわけを理解するようにしている」と回答した生徒は減少傾向にあり、全国を下回っている。今後も、解き方や考え方を書くことを重視した授業を工夫し、筋道を立てて考える力、言葉や数・式を使って数学的に表現できる力を高めていく必要がある。

4. 学校質問紙の結果

1 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言に関して 学習規律～落ち着いた学級

質問番号	質問事項
7	調査対象学年の児童（生徒）は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか。

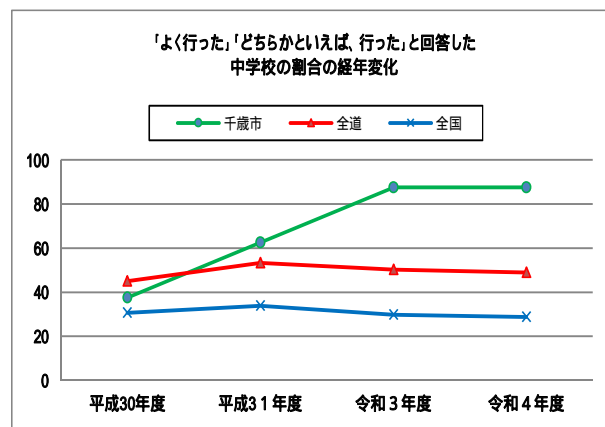
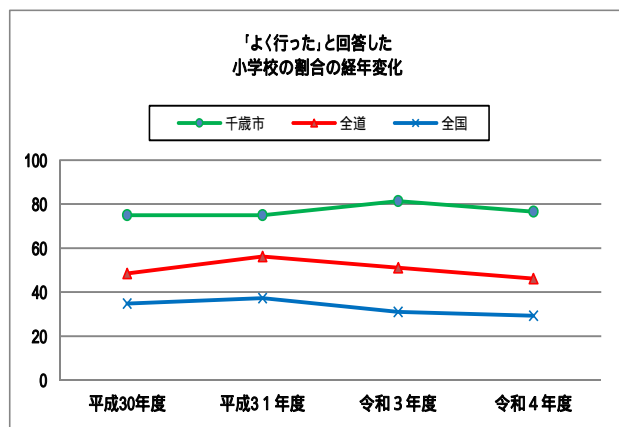
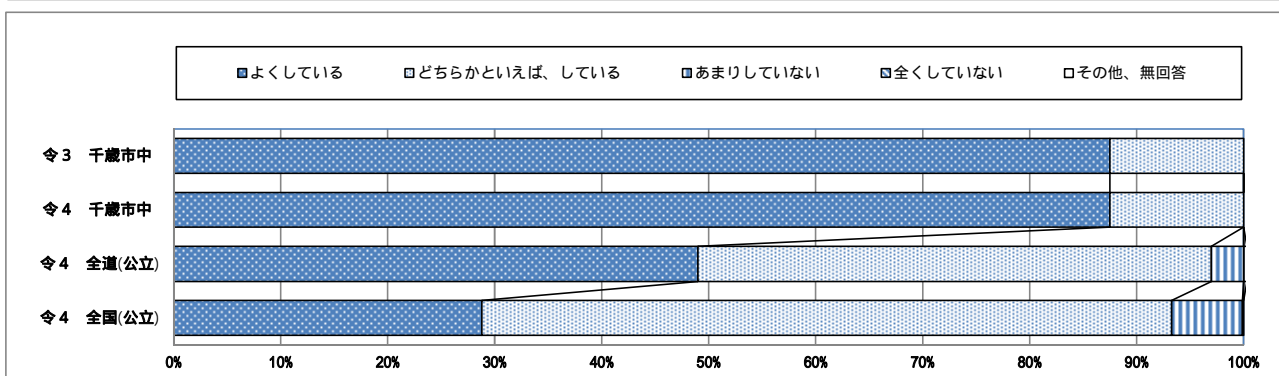
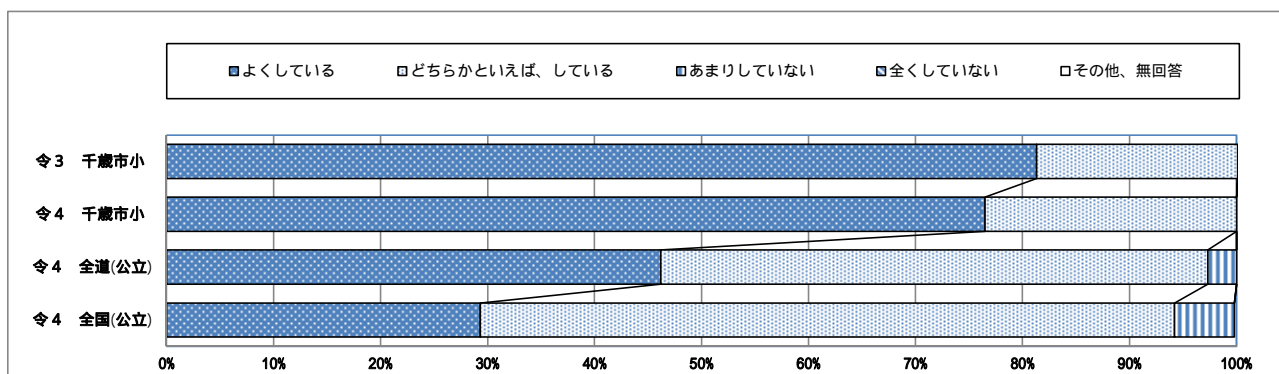


小学校は増加し、中学校は減少している

「そのとおりだ」と回答した学校の割合は、小学校は64.2%であり、全国（42.0%）を22.2ポイント上回って、回復の傾向が見られる。中学校は50.0%であり、全国（中65.1%）を15.1ポイント下回って、減少の傾向が見られる。私語のない落ち着いた学習環境は学力向上の基盤である。児童生徒にきまりを守ることで学習に集中できること、その結果、わかるようになり、学ぶことがおもしろくなることを理解させることが大切である。また、学年が進むことによる学級替えや担任交代等に左右されないよう、校内で統一した取組を行う必要がある。更に、年に2回市内全校（北進小中学校を除く）統一で行っているハイパーQ U検査の結果をよく分析し、学級の状態を常に客観的に把握するとともに、校内で結果を共有し、効果的な取組を交流するなどして、改善策に素早く着手することも重要である。

検証改善サイクルの確立

質問番号	質問事項
17	児童（生徒）の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか。

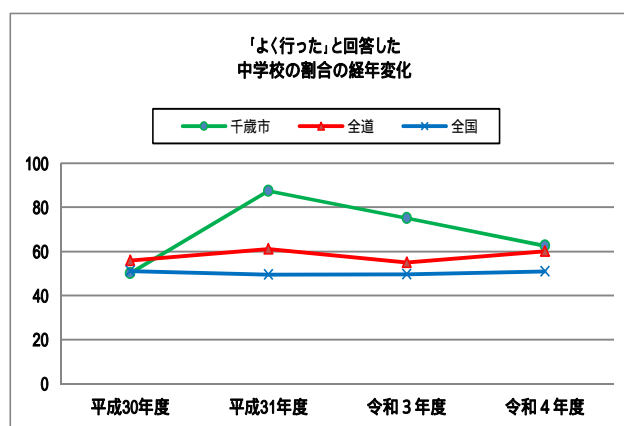
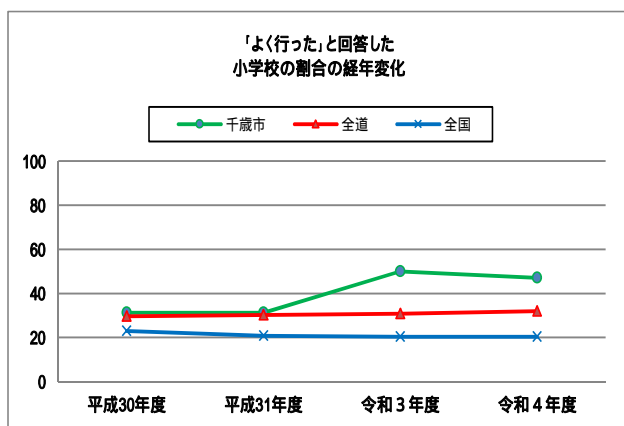
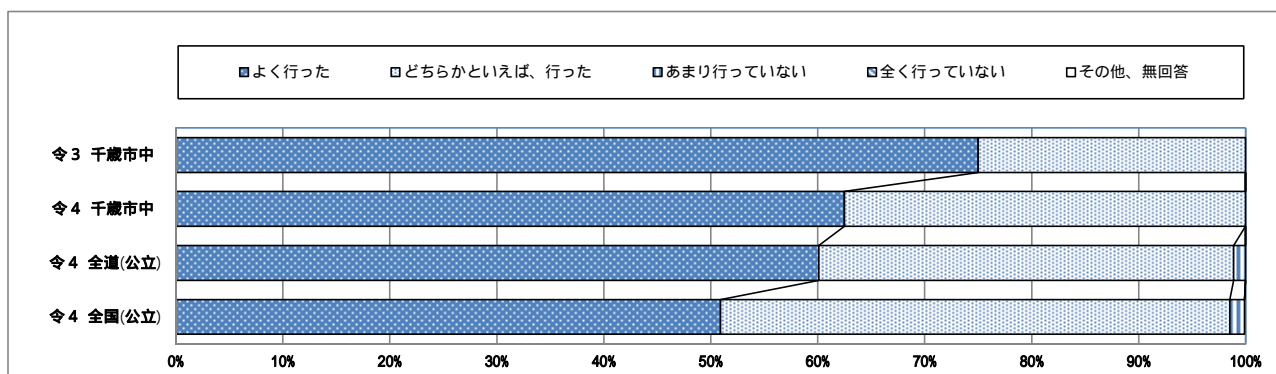
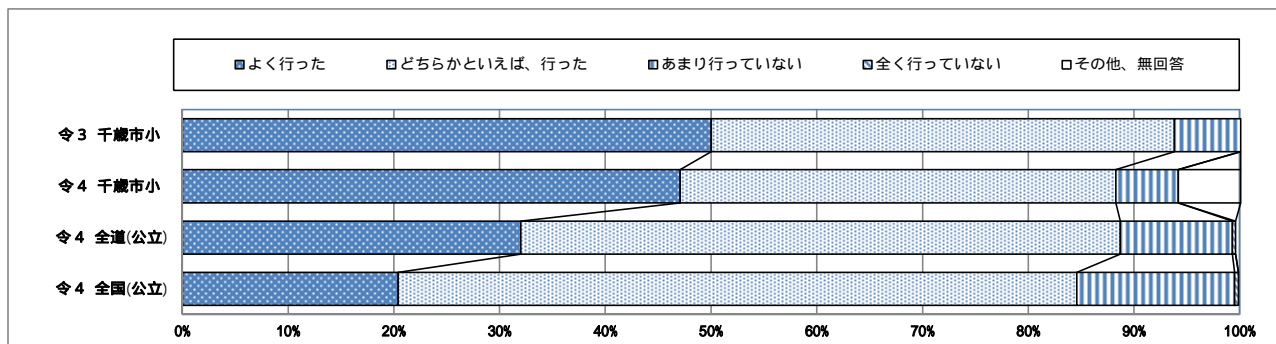


小・中学校ともに全国を大きく上回る取組がなされている。

「よく行った」と回答した学校の割合は、小学校は76.5%、中学校は87.5%と全国（小29.3%、中28.8%）を大きく上回る取組がなされている。学力向上の取組を組織的、計画的に実行し、成果につなげるためには、計画、実施、評価、改善のサイクルの確立が必要である。そのためには、全国学力・学習状況調査結果はもとより市独自で実施しているNRT学力検査、ハイパーQ U検査の分析結果から課題を整理し、具体的な方策を全校一体となって実践するとともに進行管理を徹底し、検証改善サイクルの確実な運用を図ることが大切である。特に評価については、取組の成果を数値により客観的に把握し、実施効果の高い取組は継続し、実施効果の低い取組については迅速に改善を図るなどの措置を講じていくことが重要である。

キャリア教育

質問番号	質問事項
8	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか。

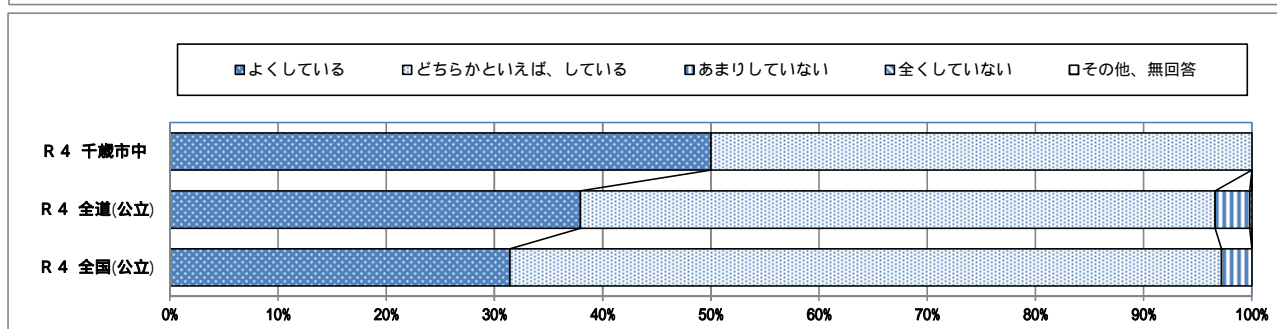
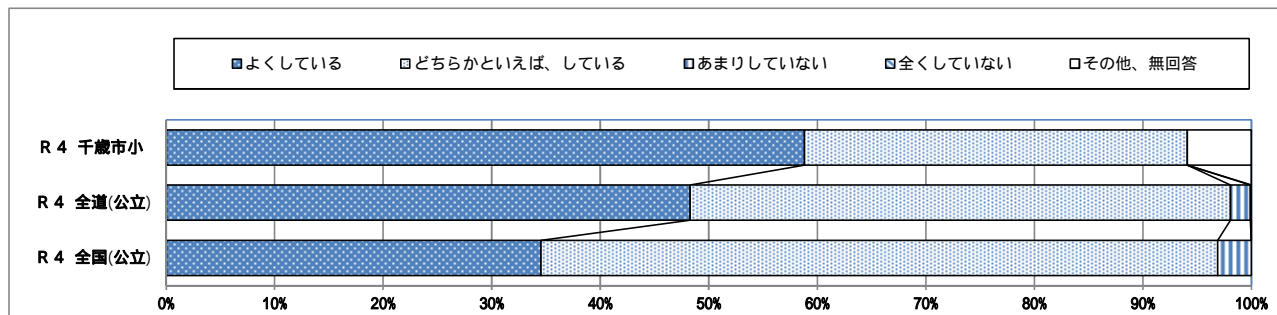


小学校、中学校とも全国を上回る取組が行われている

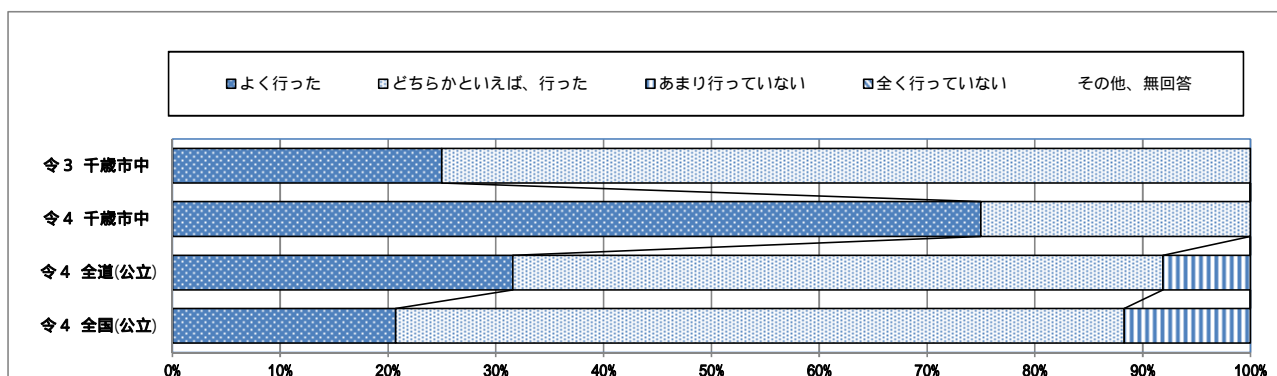
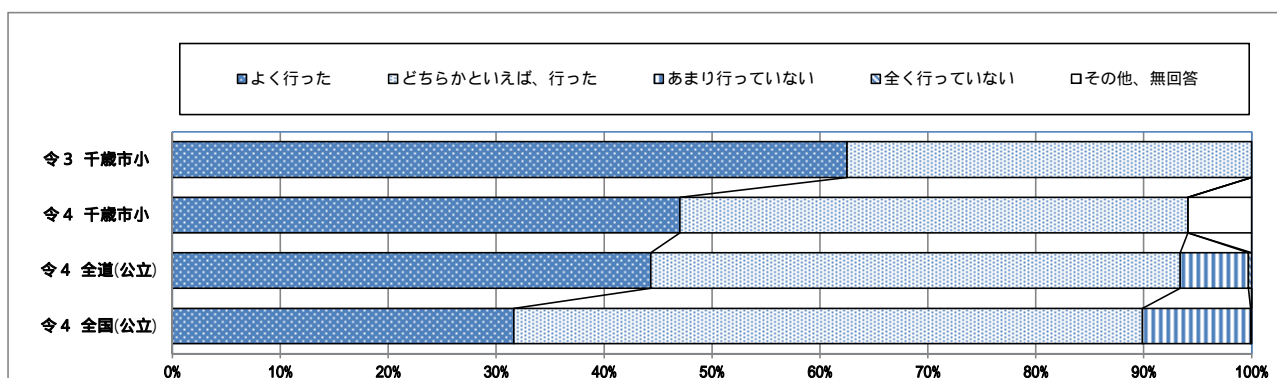
「よく行った」と回答した小学校は47.1%であり、前回（令和3年度）より2.9ポイント減少したが全国(20.4%)を上回っている。中学校は62.5%であり、前回より12.5ポイント減少したが全国(50.9%)を上回っている。児童生徒質問紙において「将来の夢や希望をもっている」と回答した児童生徒は、全国を100とした指数で小学校においては101.4ポイント、中学校では107.5ポイントである。夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、前向きに自己の将来を設計する指導については引き続き一層の充実を図る必要がある。各学校においては特別活動の学級活動を要として全ての教育活動が児童生徒のキャリア形成につながっていることをふまえ、コロナ禍により減少していたボランティア活動や地域人材の活用、職場体験学習等の取組についても可能な限り回復させて自己有用感を高め、社会人としての自立を目指す積極的な姿勢、夢や目標をもって自己実現を目指す姿勢を育てていくことが大切である。

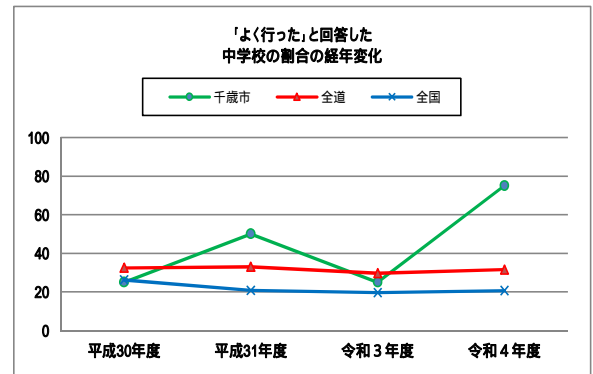
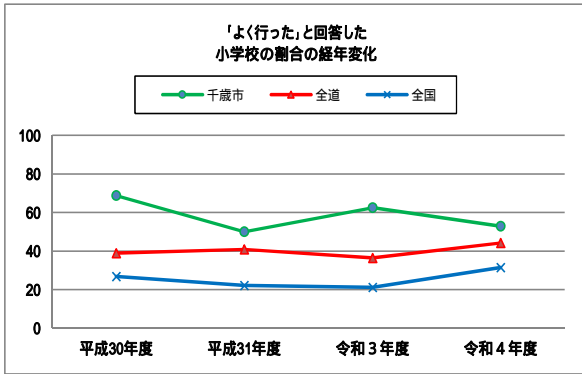
授業改善～発問や指導の工夫、習得・活用・探求の学習過程

質問番号	質問事項
28	授業において、児童・生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか。



質問番号	質問事項
30	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、習得・活用及び探求の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか。





いずれも小・中学校ともに全国を上回っているが、一層の充実が求められる

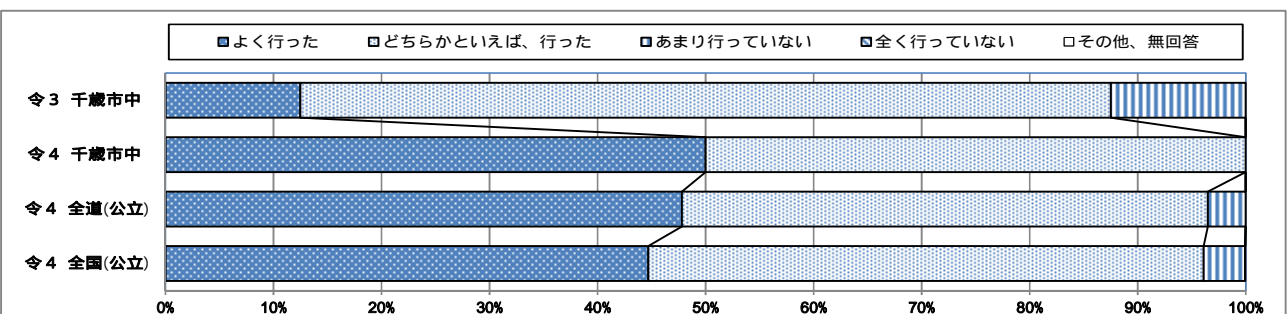
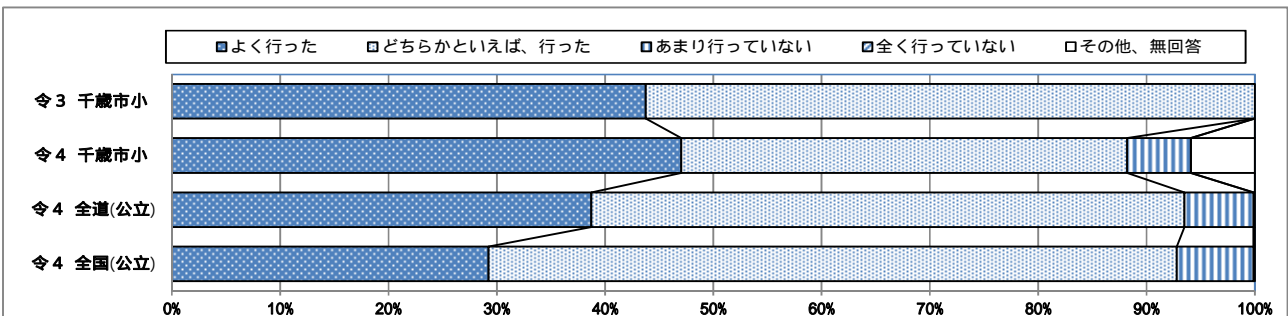
「様々な考えを引き出す発問や指導の工夫」についての取組について「よく行った」と回答した学校は、小学校は58.8%であり、全国(34.5%)を24.3ポイント上回っている。中学校は50.0%であり、全国(31.4%)を18.6ポイント上回っている。

「習得・探求の学習過程を見通した指導方法の改善および工夫」を「よく行った」と回答した学校の割合は、小学校は47.1%で全国(31.6%)を上回り、中学校においても75.0%と全国(20.7%)を大きく上回っている。前回との比較では小学校は15.4ポイント減少し、中学校は50.0ポイント増加した。

学校は、児童生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実が求められている。指導に当たっては児童生徒の様々な考えを引き出す発問や指導を工夫し、習得・活用・探求という学習サイクルの確立を図ることが「主体的・対話的で深い学び」を実現するポイントとなる。その際、児童生徒の実態によって、活用するための知識や技能が十分でない場合は、確実に習得させておくことが重要である。

授業改善～国語、算数・数学、理科の指導

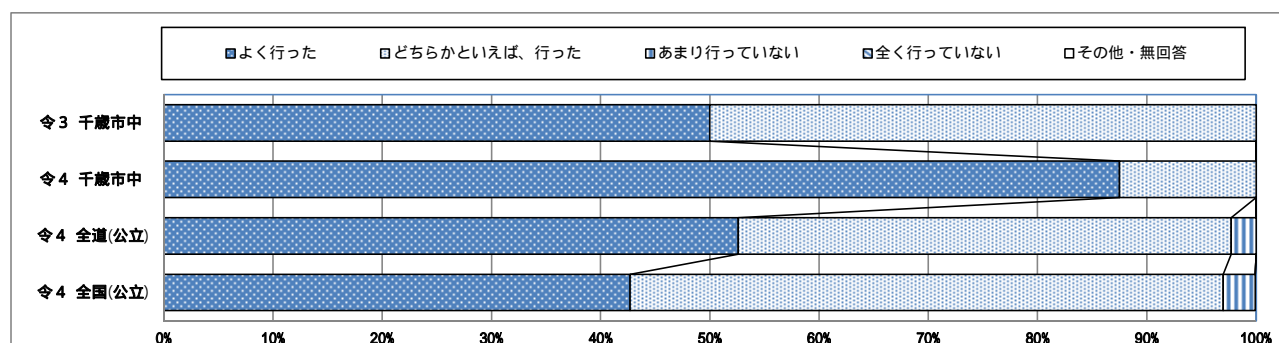
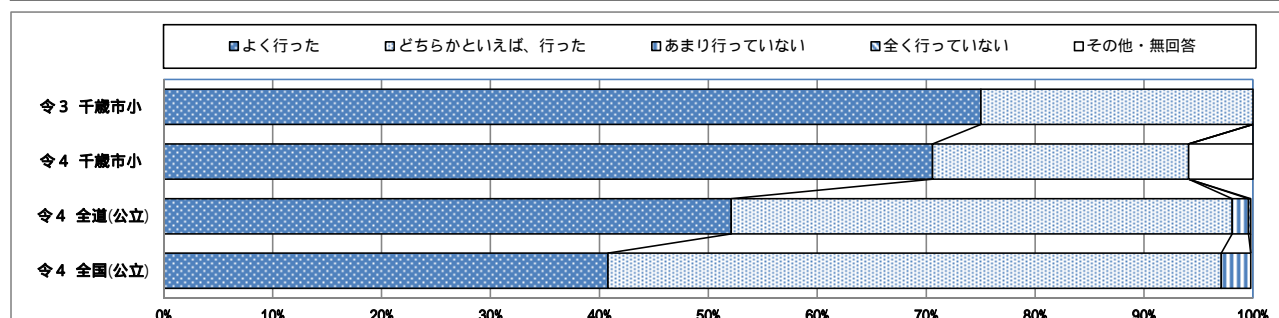
質問番号	質問事項
4 1	国語の指導として、前年度までに、目的に応じて自分の考えとそれを支える理由との関係(根拠)を明確にして書いたり、表現を工夫したりする授業を行いましたか



「根拠を明確にした表現、公式やきまりの根拠を理解させる授業」の充実が求められる

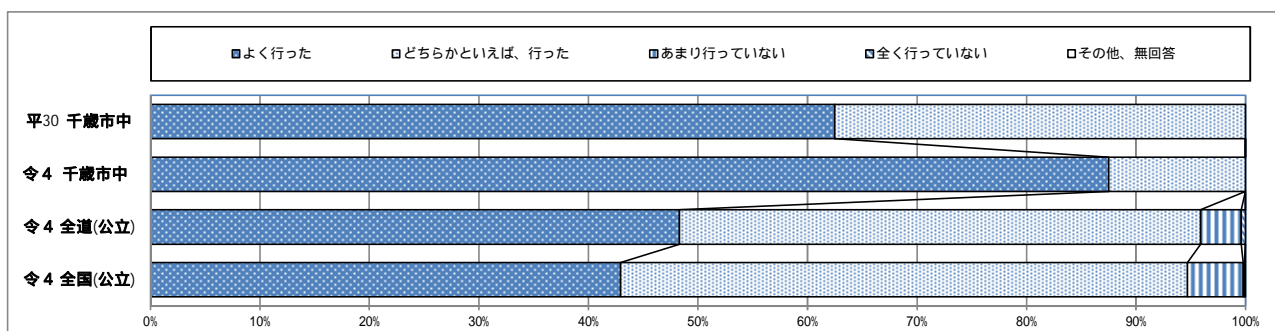
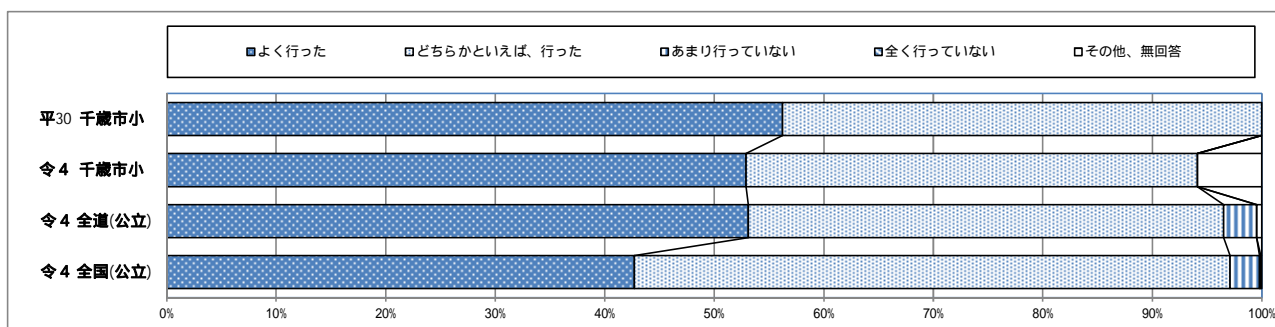
国語の「根拠を明確にして書いたり表現を工夫したりする授業」について、「よく行った」と回答した小学校は47.1%で、全国(29.2%)を17.9ポイント上回り、中学校は50.0%で全国(44.7%)を5.3ポイント上回った。前回との比較では、小学校は3.3ポイント、中学校は37.5ポイント増加した。筋道の通った説得力のある文章を書く際には、理由(根拠)を明確にしながら自分の考えを述べる必要がある。また、読み手が理解しやすいように、文章全体の構成や展開を考えたり、目的や意図に応じて書き表し方を工夫したりすることが大切である。そのためには、書いた文章を推敲する学習を繰り返し、書き直したものが読みやすくなったという実感の持てる指導が必要となる。従って、説明したり、意見を述べたり、考えたりしたことについて書く活動などを指導計画に位置付け、書いた文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の改善点や良い点に気付かせ、書く意欲を引き出す指導が大切である。

質問番号	質問事項
48	調査対象学年の児童(生徒)に対する算数(数学)の授業において、公式やきまりなどを指導するとき、児童・生徒がそのわけ(根拠)を理解できるように工夫しましたか。



算数・数学の「公式やきまりを指導するとき、その根拠を理解できるように工夫した授業」について、「よく行った」と回答した学校は、小学校は70.6%で全国(40.8%)を29.8ポイント上回り、中学校は87.5%で全国(42.7%)を44.8ポイント上回っている。前回との比較では、小学校は4.4ポイント減少し、中学校は37.5ポイント増加した。ある事柄が成り立つ理由を数学的に説明する際には、その根拠として成り立つ事柄を示して理由を説明する必要がある。その際、説明・証明の根拠として用いる公式やきまりの指導においては、児童生徒がその根拠を理解できるよう、日常の具体的な場面に対応させる、図や式を用いて関係性を理解させるなど、数学的活動を通して身につけさせることが大切である。

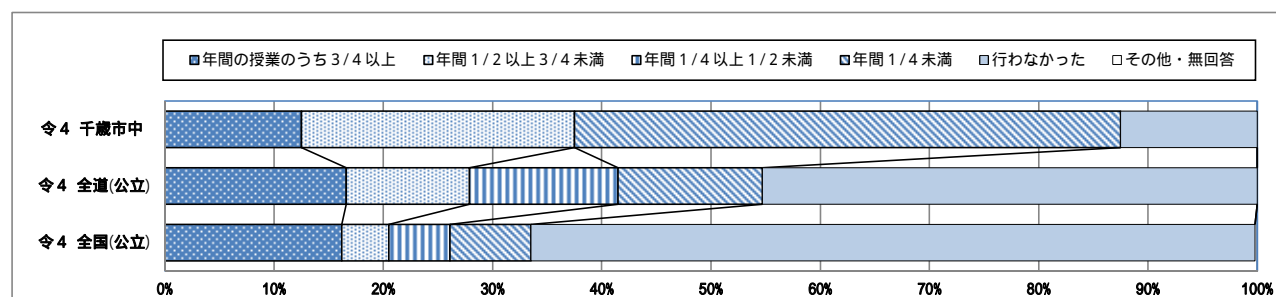
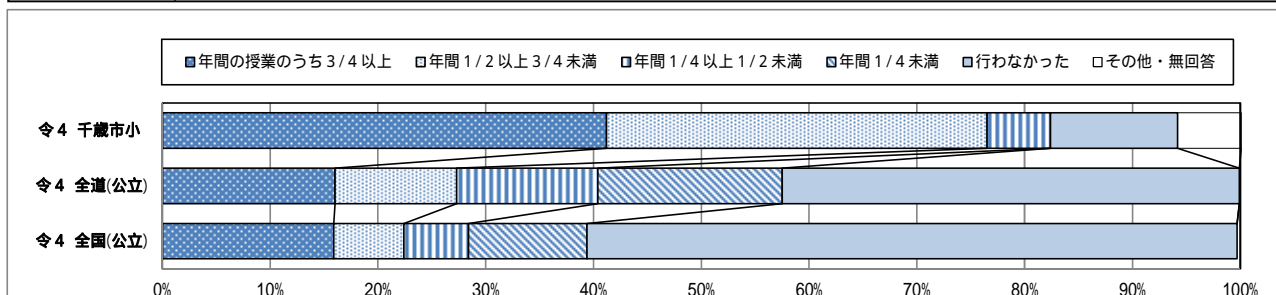
質問番号	質問事項
53	調査対象学年の児童(生徒)に対する理科の授業において、前年度までに、観察や実験の結果を整理(分析)し考察(解釈)する指導を行いましたか。



理科の「観察や実験の結果を整理（分析）し考察（解釈）する指導」について、「よく行った」と回答した学校は、小学校は52.9%で全国(42.7%)を10.2ポイント上回り、中学校は87.5%で全国(42.9%)を44.6ポイント上回っている。前回（平成30年度）との比較では、小学校は3.4ポイント減少し、中学校は25.0ポイント増加した。観察、実験などの結果について、分析し、解釈して結論を導き出す際に、根拠となる事実と解釈を表現できるようにすることが大切である。指導に当たっては、事象の観察から抽出した要因や実験の結果、他者の考え等を基に導き出した自らの考えを説明したり、書いて表現したりする学習活動の充実が図られるよう、指導計画、学習過程の工夫・改善が求められる。

個に応じた指導～習熟度に応じた指導

質問番号	質問事項
44	調査対象学年の児童（生徒）に対する指導方法として、前年度に、算数（数学）の授業における習熟度に応じた指導をどの程度行いましたか。

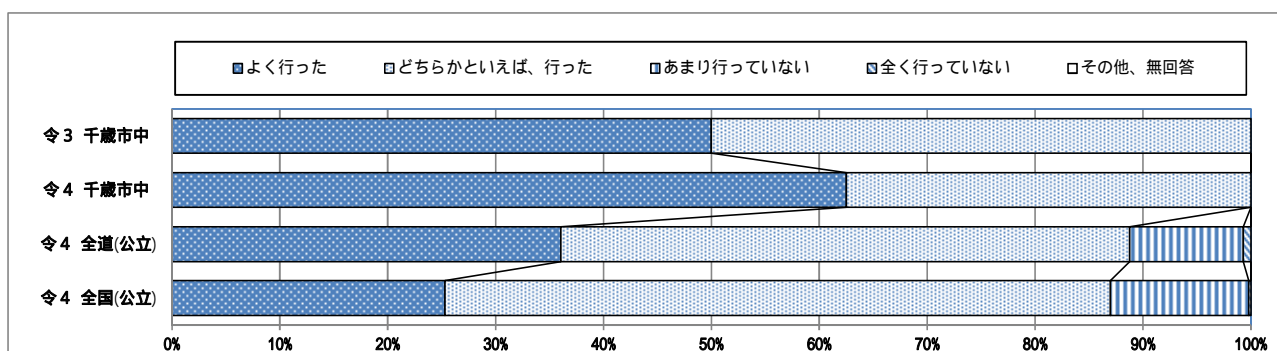
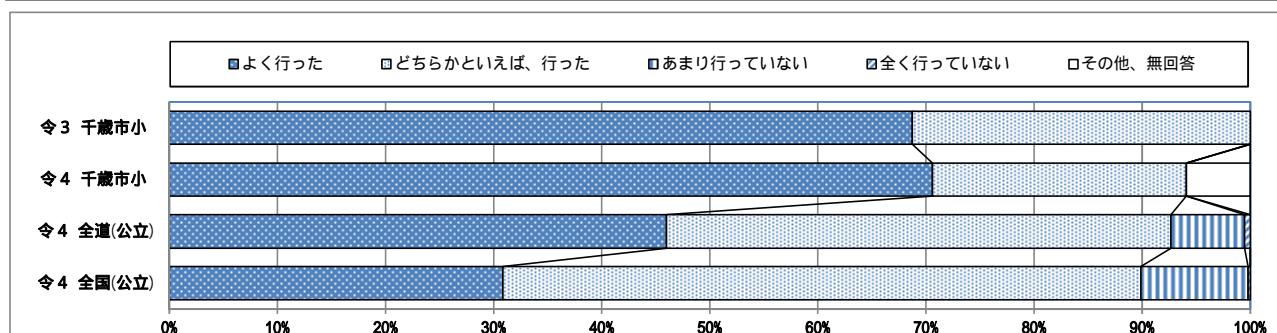


算数・数学の「習熟度に応じた指導」は全国を上回る

算数・数学の指導として習熟度に応じた指導を「年間 1/2 以上行った」と回答した学校は、小学校では 76.5%、中学校については、37.5%である。全国（小 22.4%、中 20.5%）との比較では、小学校は 54.1 ポイント、中学校は 17.0 ポイント上回っている。小学校においては平成 27 年度より学習支援員を活用した習熟度別指導が小規模校を除く市内全校（14 校）で実施されており、習熟の程度に応じた指導が浸透している様子がうかがえる。中学校においても平成 31 年度には学習支援員が小規模校を除く 6 校全てに配置されたことから習熟の程度に応じた指導の充実が期待される。今後、個に応じたきめ細かな学習指導や習熟の程度に応じた指導を充実させ、学習内容の確実な習得を図ることはもとより、知識を活用して問題を解決する能力を一層高め、下位層、上位層いずれも伸ばす指導の工夫が急務である。

家庭学習の課題を指導改善、学習改善に生かす

質問番号	質問事項
79	家庭学習の取組として、学校では、児童（生徒）が行った家庭学習の課題について、その後の教師の指導改善や児童（生徒）の学習改善に生かしましたか（教科共通）



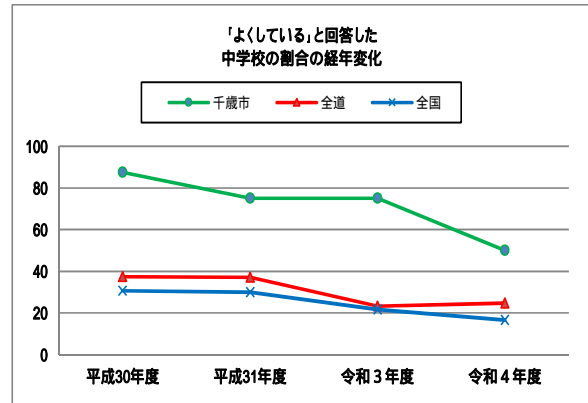
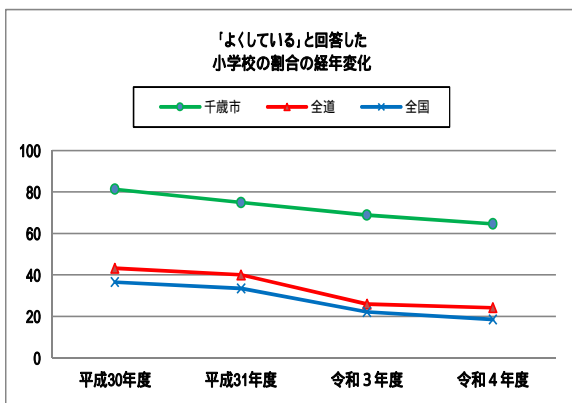
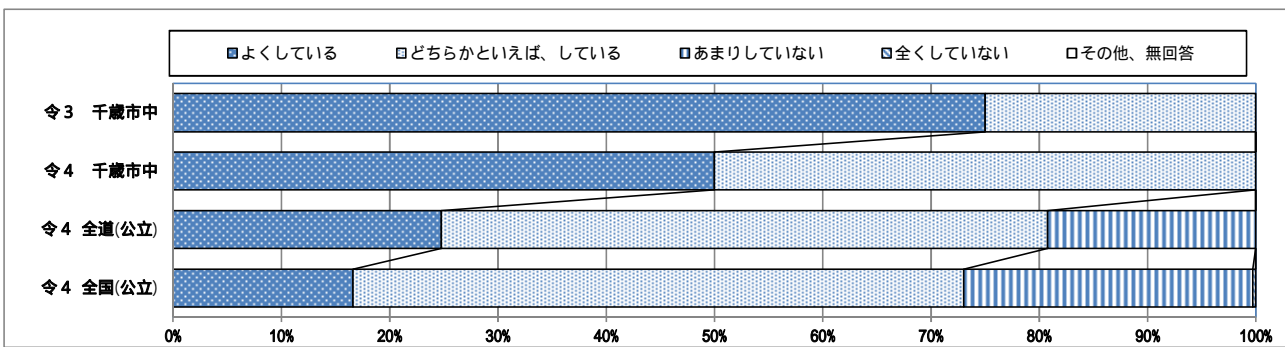
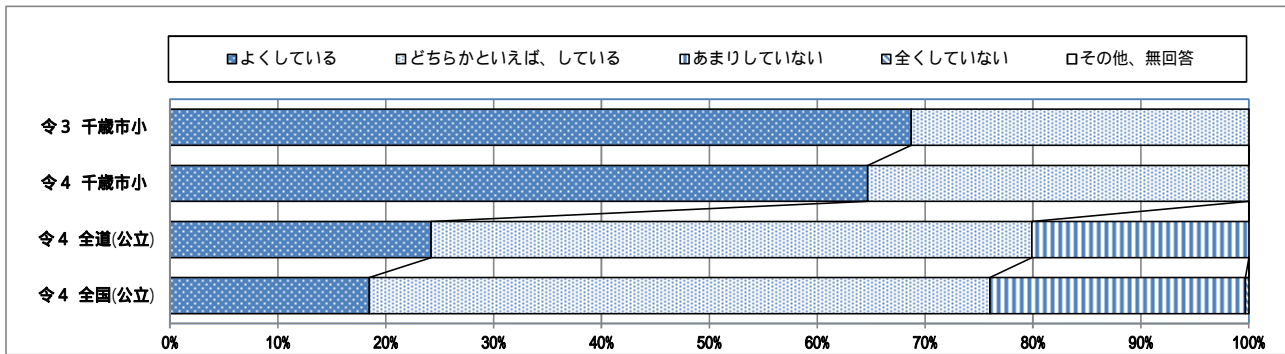
小学校、中学校とも全国を上回っている

家庭学習の課題を指導改善や児童生徒の学習改善に生かす取組を「よく行った」と回答した小学校は 70.5%、中学校は 62.5%となっており、全国（小 30.8%、中 25.3%）との比較では、小学校は 39.7 ポイント、中学校は 37.2 ポイント上回っている。学校は家庭学習の習慣が身に付くよう、そのきっかけ作りとして課題（宿題）を提供している。これまでも各校においては、家庭学習の習慣づくりや内容の充実のため、「家庭学習の手引き」を作成・配布するとともに、具体例を挙げながら指導したり、学年・学級だよりに家庭学習のヒントを載せたりするなどの工夫・改善を図ってきた。

家庭学習の課題（宿題）を指導改善や児童生徒の学習改善に生かす取組については、これまでも理解が不十分な問題については授業等で確認し、期間を置いて再度与えるなど、与えた課題について確実に身に付けさせる指導について工夫が重ねられてきたが、今後は予習を生かす授業づくりや一人一台端末を活用した家庭学習など、学校の授業と家庭学習をつなぐ仕組みの一層の構築が望まれる。

2 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」に関して 教職員研修の充実

質問番号	質問事項
2 1	個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科等の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加している（オンラインでの参加含む）

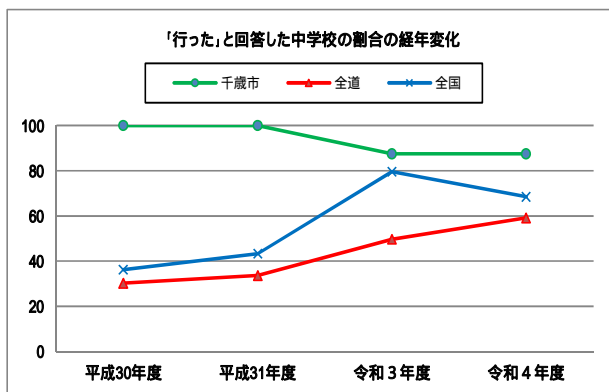
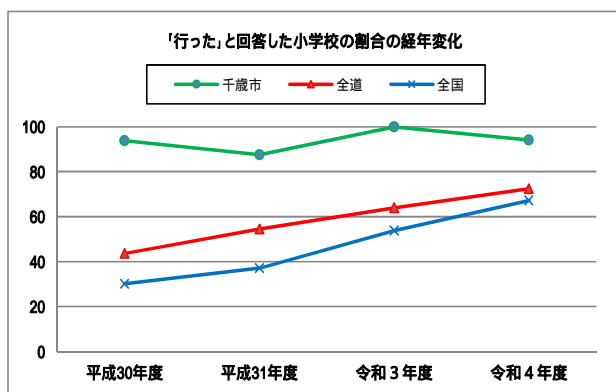
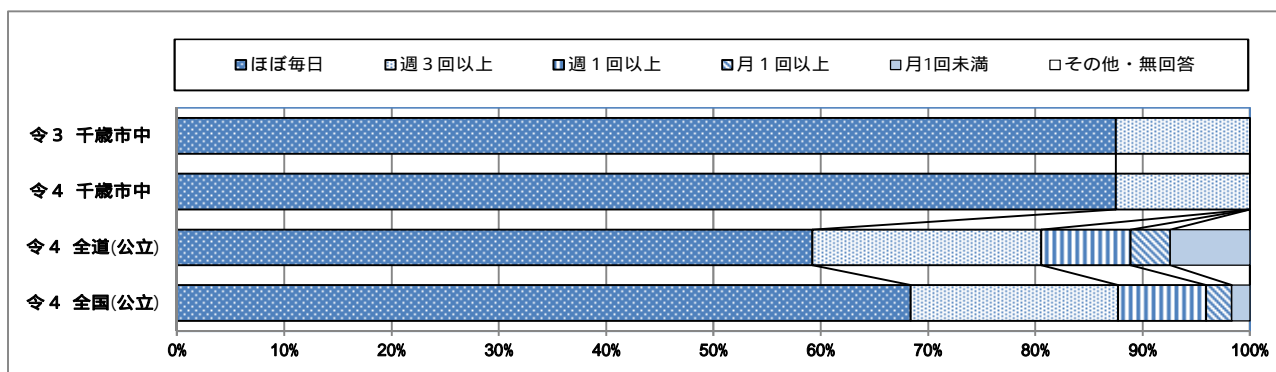
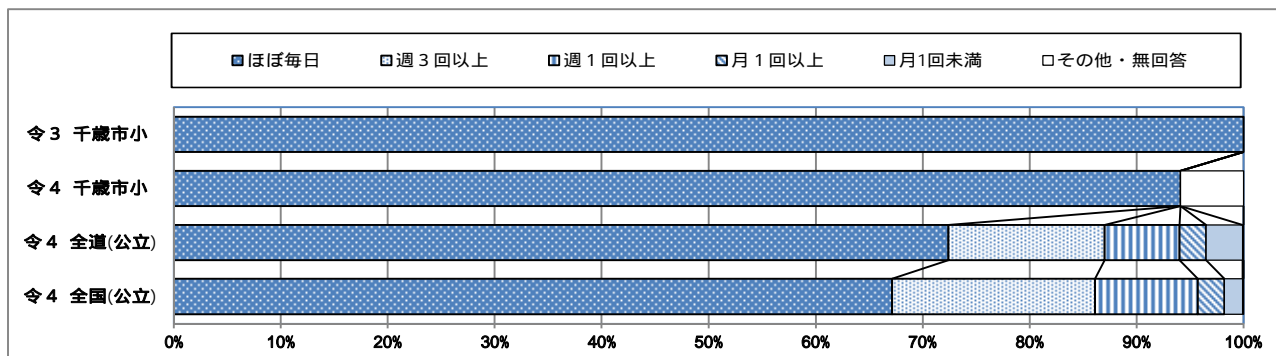


参加の仕方を工夫して研修に臨んでいる

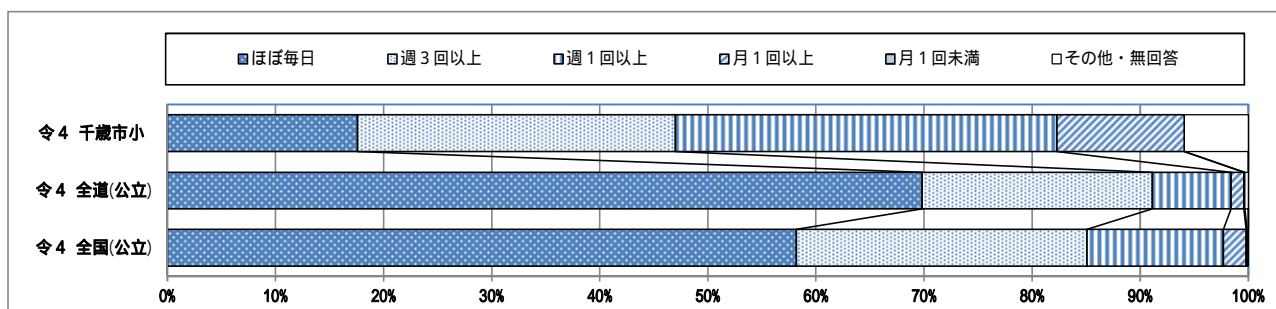
「よくしている」と回答した学校は小学校 64.7%、中学校 50.0%であり、小・中学校ともに全国（小 18.5%、中 16.6%）を大きく上回るが、感染症対策から、研修・研究の機会の減少、参加人数制限によって、小学校は減少傾向にあり、中学校も前回より減少した。校外の専門教科等に関する研究会、長期休業中に開催される千歳市教育委員会主催の研修や石狩教育研修センター主催の研修については、オンライン研修も含め、参加の仕方を工夫することによって、教員が教科の専門性を高めたり、個別の学校では招聘できない著名な講師から直接教示を受けたりする機会が確保されている。今後は、個々の教員が受講した研修の結果を校内全体に還元できる研修体制を構築し、授業改善に結びつく指導方法の交流や指導過程の見直しを行うなど、限られた時間で効果的に授業力向上を図る仕組みを整える必要がある。

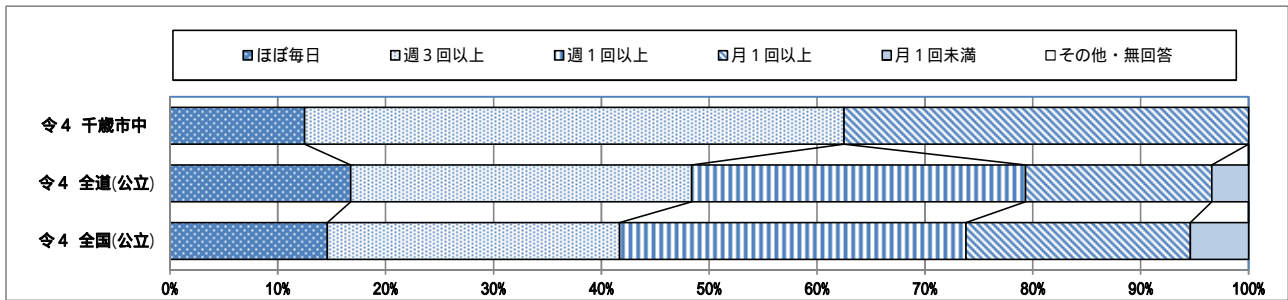
ICT機器の活用

質問番号	質問事項
小56 中54	調査対象学年の児童（生徒）に対する指導において、前年度に教員が大型提示装置（プロジェクター、電子黒板等）等のICTを活用した授業を1クラスあたりどの程度行いましたか。



質問番号	質問事項
小59 中57	調査対象学年の児童（生徒）に対し、前年度までに、児童・生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業でどの程度活用しましたか。





小・中学校とも電子黒板等は日常的に活用、一人一台端末は今後の活用に期待

電子黒板等の大型提示装置使用の授業を「ほぼ毎日」と回答した学校は、小学校で94.1%、中学校は87.5%であり小・中学校とも全国(小67.2%、中68.4%)を大きく上回り、積極的に活用されている。

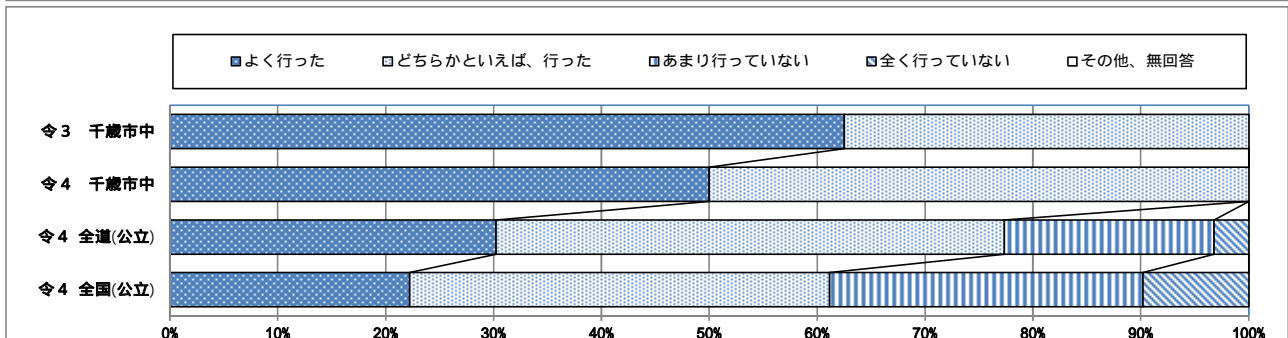
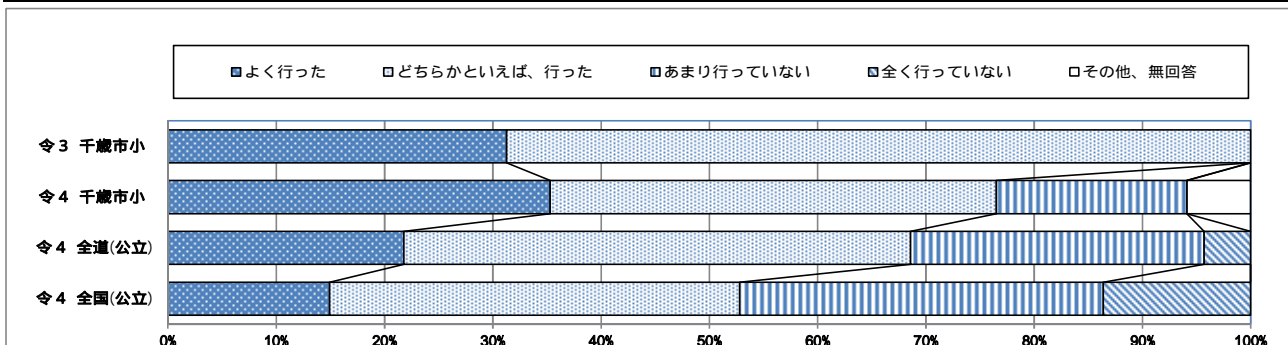
本市では、全普通教室に加え、小学校少人数指導用教室、中学校特別教室、小・中学校特別支援学級教室への電子黒板・実物投影機等が配備され、デジタル教科書についても、平成28年度までに小・中学校への配備を終えたことから、全国、全道に比べて電子黒板等大型ICT機器の活用頻度が高い。

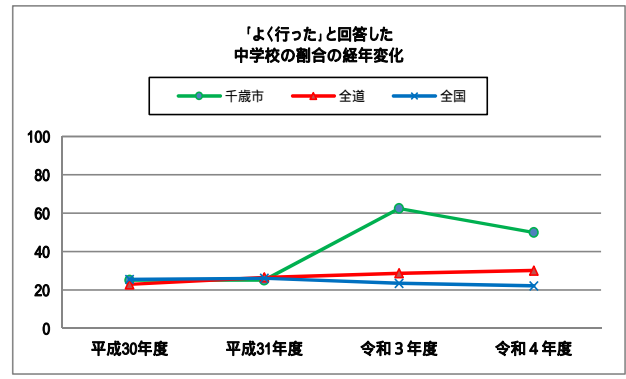
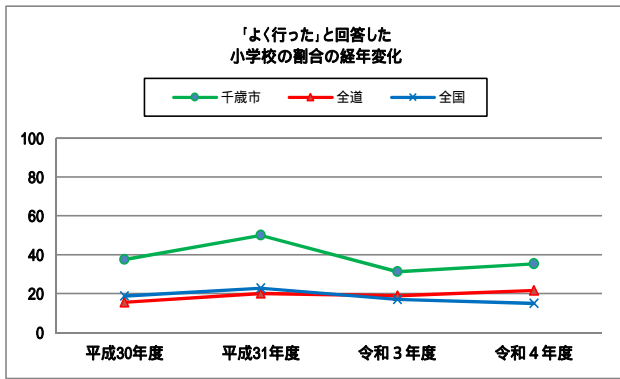
一人一台端末を活用した授業を「ほぼ毎日」と回答した学校は、小学校17.6%、中学校12.5%であり、いずれも、全国(小58.2%、中14.6%)を下回っているが、小学校は令和4年度に一人一台端末の全校配備が整うことから、今後活用が進むことが期待される。中学校については、全国との差が小さく、週3回以上を含めると62.5%と、全国(41.7%)を上回る活用がなされている。

今後は、調べる・まとめる・説明する等の活動、さらに感想や意見を伝え合う学習のツールとして、オンライン授業も含めた効果的な活用方法等について校内外での研修を充実させ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指した授業改善に生かしていくことが望まれる。

3 小中連携・一貫教育の取組に関して 教育課程に関する共通の取組

質問番号	質問事項
小69 中67	前年度までに、近隣等の中(小)学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行いましたか。

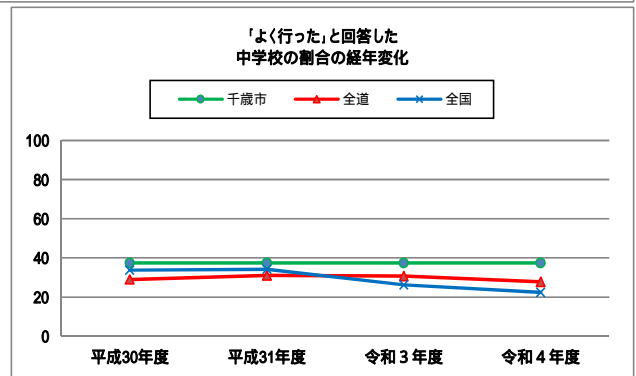
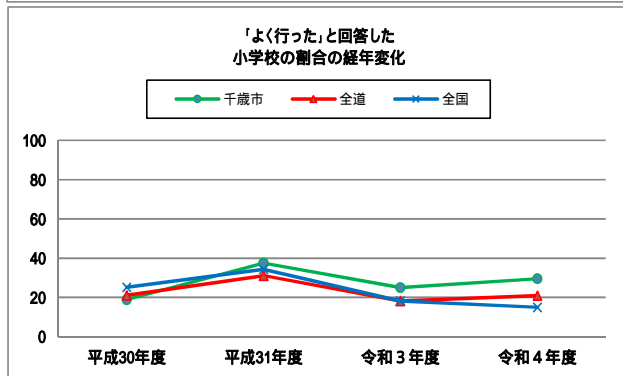
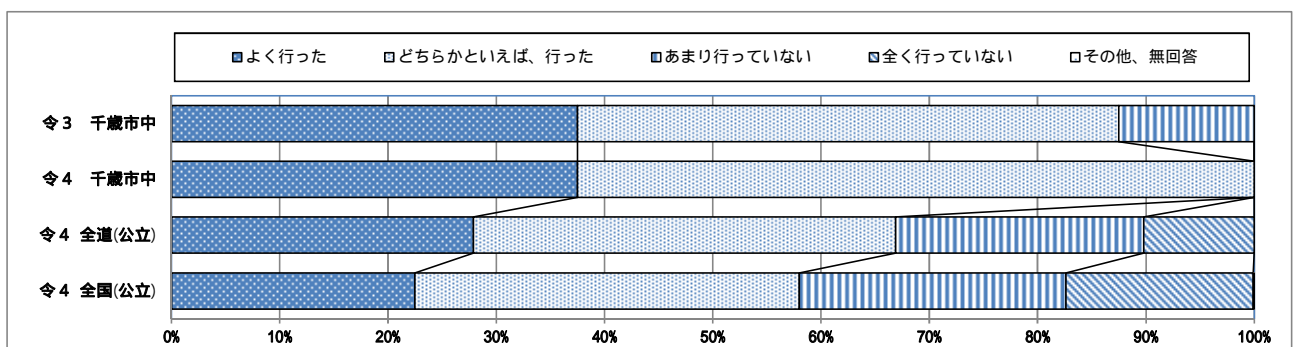
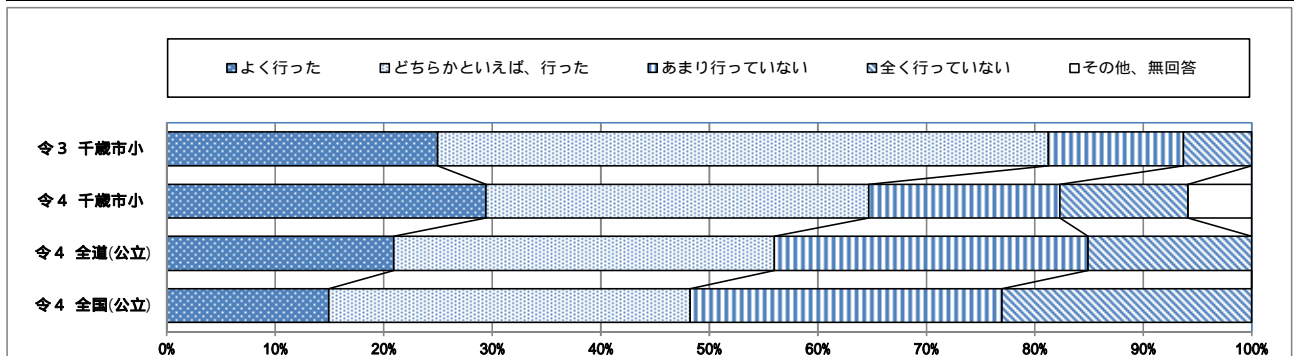




「近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行ったか」という質問に対して、「よく行った」と回答したのは、小学校は前回より増加して35.3%、中学校は減少して50.0%であり、小・中学校ともに全国(小14.9%、中22.2%)を上回っている。

合同の研修

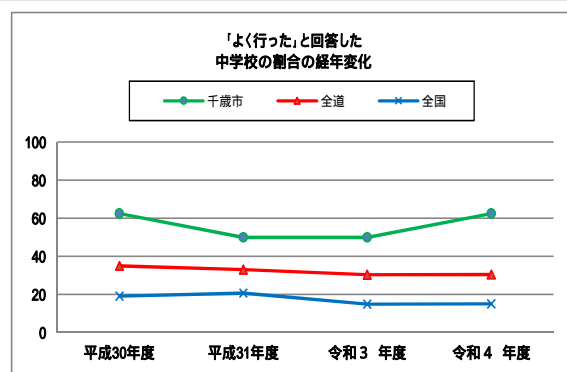
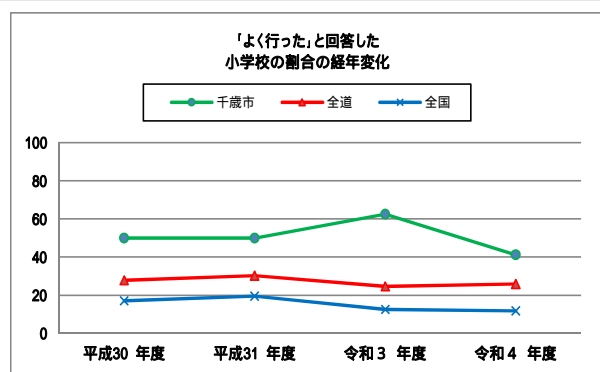
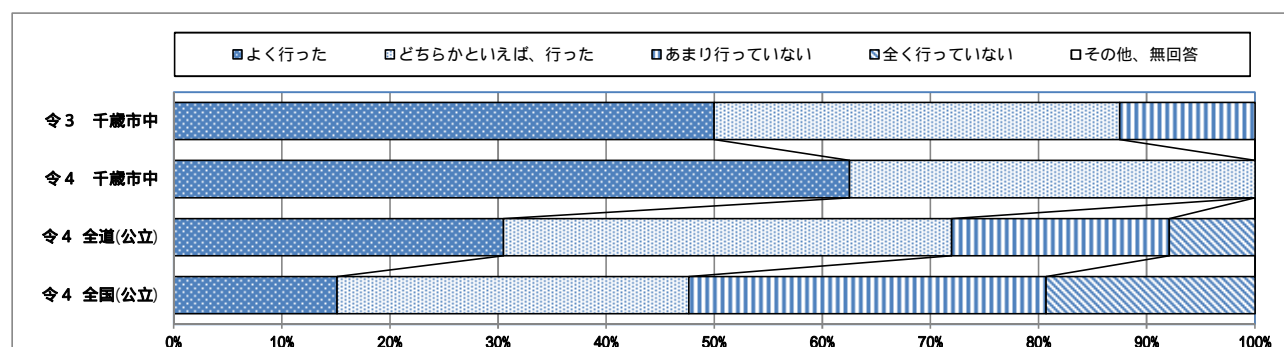
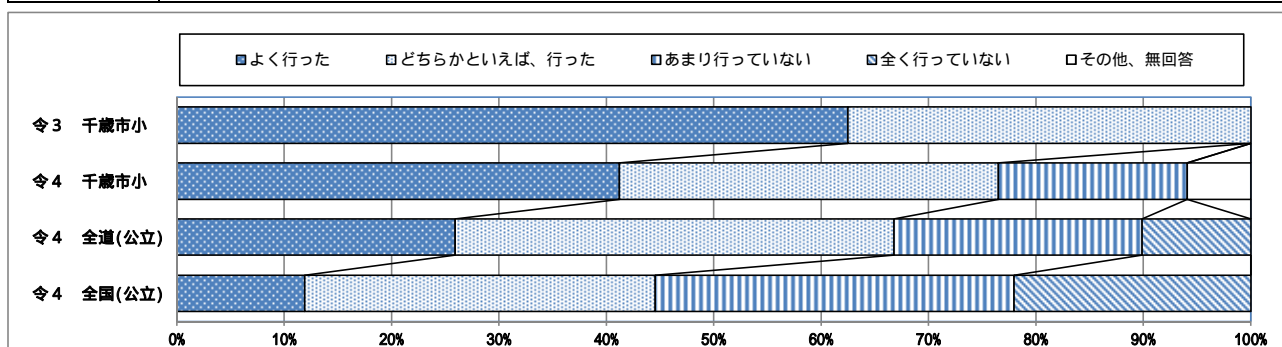
質問番号	質問事項
小70 中68	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行いましたか。



「前年度までに、近隣等の中（小）学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行ったか」という質問に対して「よく行った」と回答したのは、小学校は前回より増加して 29.4%、中学校では前回同様 37.5%であり、小・中学校ともに全国（小 14.9%、中 22.5%）を上回っている

全国学力・学習状況調査分析結果

質問番号	質問事項
小 7 1 中 6 9	令和 3 年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有しましたか。



小中連携・一貫の取組は今後深まっていくことが期待される

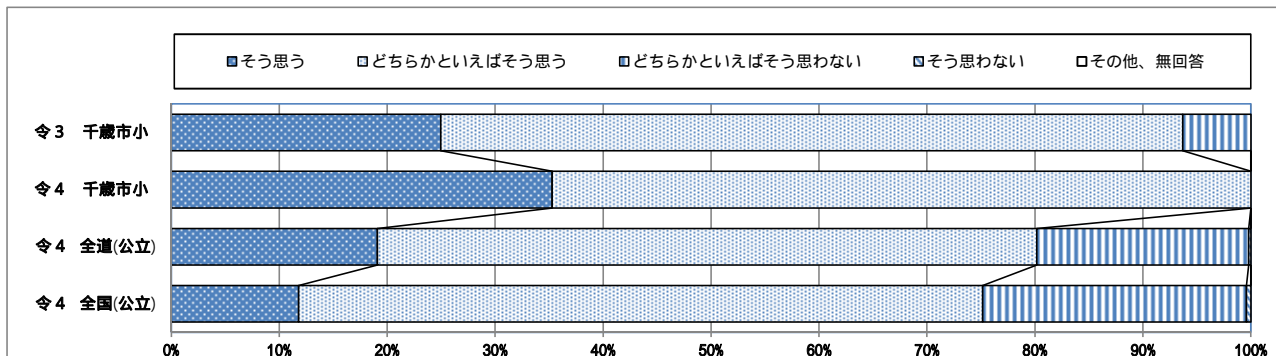
「令和 3 年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有したか」という質問では、「よく行った」と回答したのは、小学校は前回より減少して 41.2%、中学校では前回より増加して 62.5%であり、全国（小 11.9%、中 15.1%）を大きく上回っている。

に見られる小中連携・一貫教育の取組に関しては、市として平成 30 年度よりモデル校区を指定し、令和 3 年度には「小中連携・一貫教育実施要領」を策定して本格的に取り組んできたところである。今後は、全国学力・学習状況調査結果の共有をはじめとして、校区の子どもたちの義務教育 9 年間で身に付けさせるべき力を明確にして、教育課程や授業改善の方策について連携して取り組んでいくことが一層望まれる。

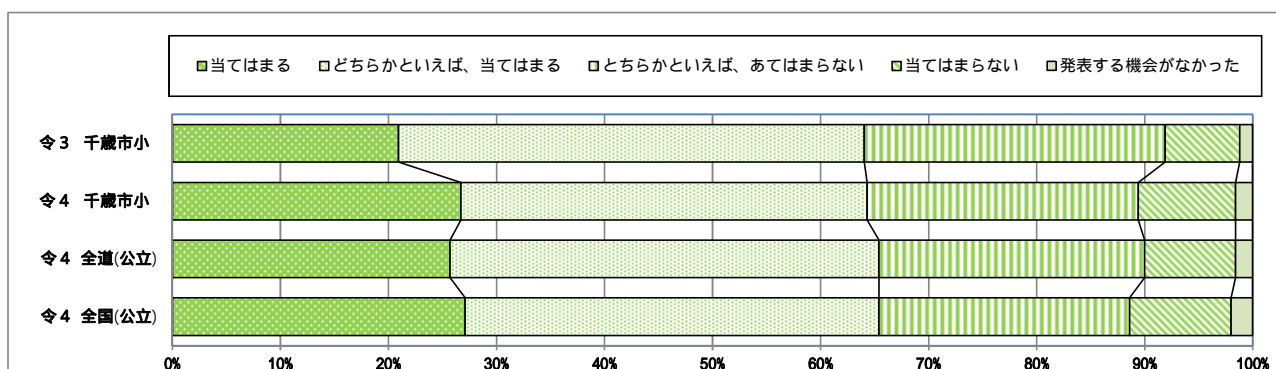
4 授業に対する教師と児童生徒の意識の違い（児童・生徒質問紙の回答と比較）

主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善 1

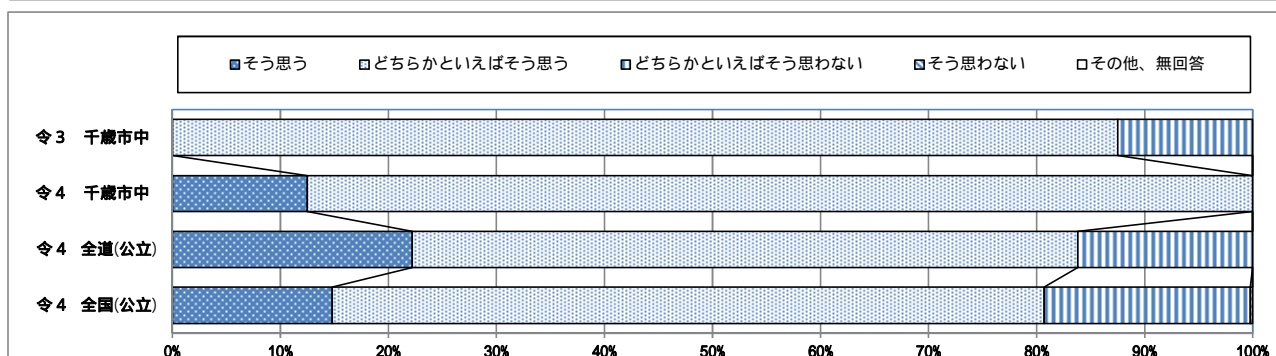
質問番号	質問事項
24	調査対象の児童は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。



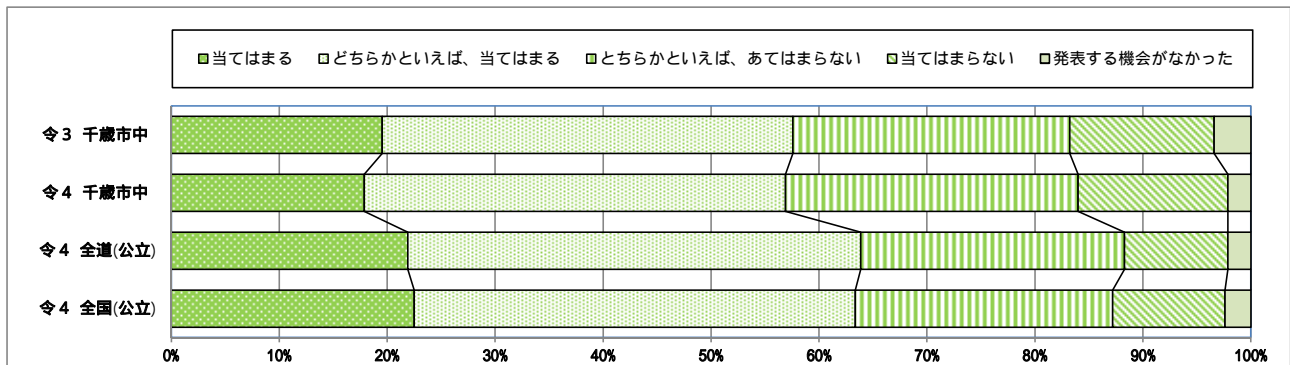
質問番号	質問事項（* 児童質問紙）
38	5年生までに受けた授業で自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。



質問番号	質問事項
24	調査対象の生徒は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。



質問番号	質問事項（* 児童質問紙）
38	1, 2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。



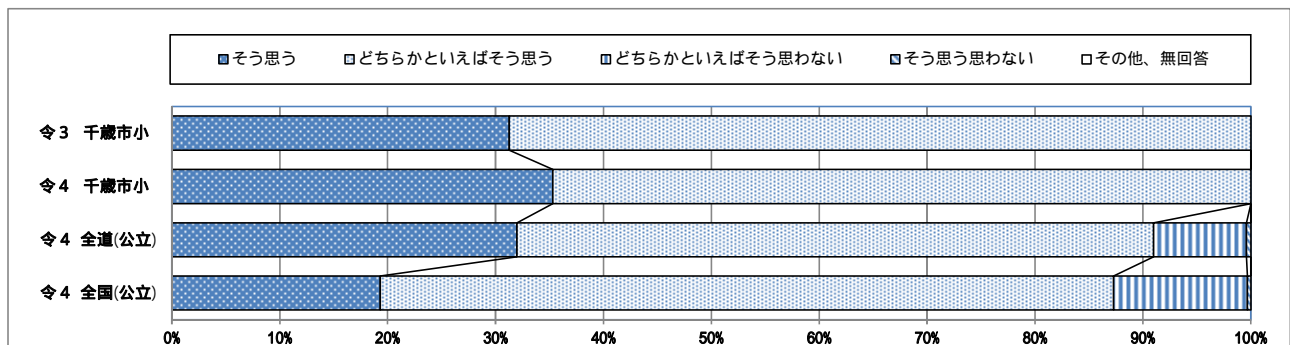
「調査対象の児童生徒は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思うか」という質問に対して「そう思う」と回答した学校は、小学校は35.3%で全国(11.8%)を上回っている。中学校は「そう思う」と回答した学校は12.5%で全国(14.8%)を下回っている。

児童生徒質問紙の「これまでに受けた授業で自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表したか」という質問に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生は26.7%(全国27.1%)、中学生は17.9%(全国22.5%)である。

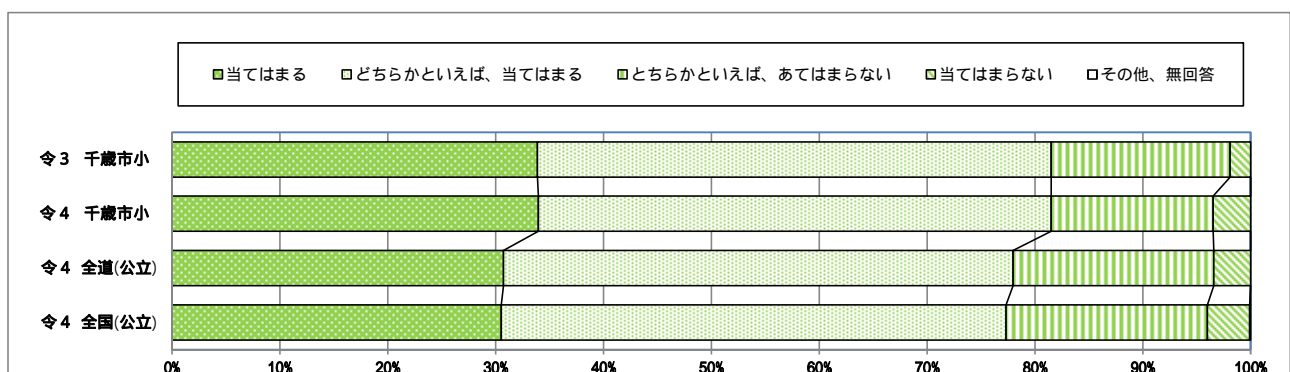
教師と、指導を受ける児童・生徒との意識の差は、小学校は4.5ポイント広がって8.6ポイント、中学校は14.1ポイント縮まって5.4ポイントである。

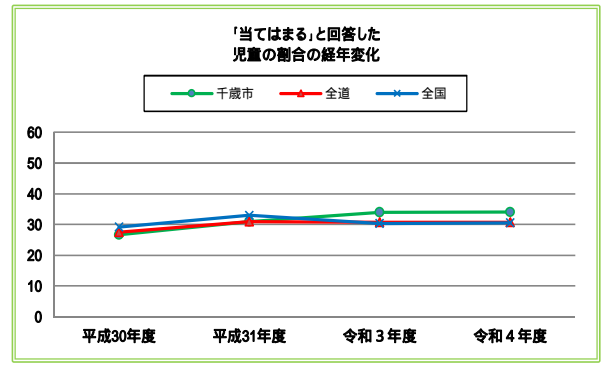
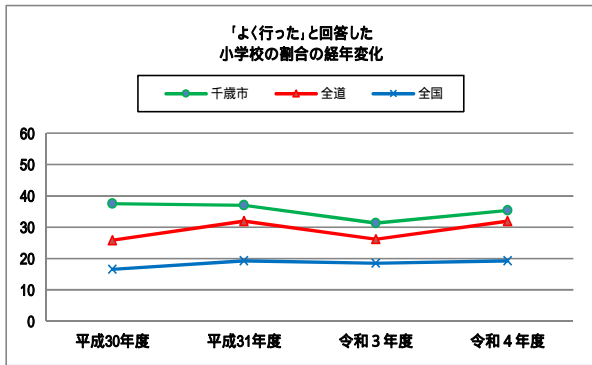
主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善 2

質問番号	質問事項
23	調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。

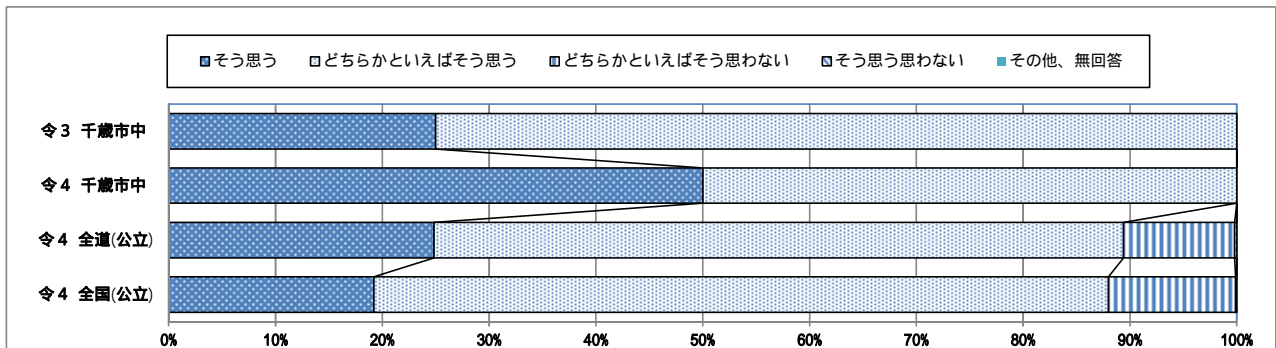


質問番号	質問事項 (* 児童質問紙)
39	5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。

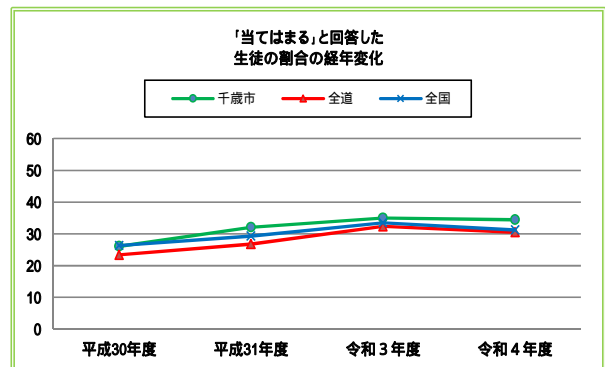
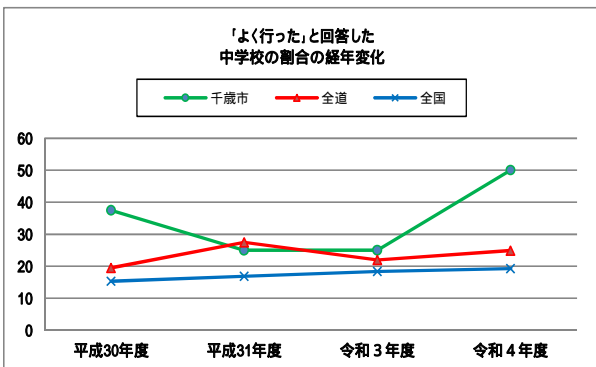
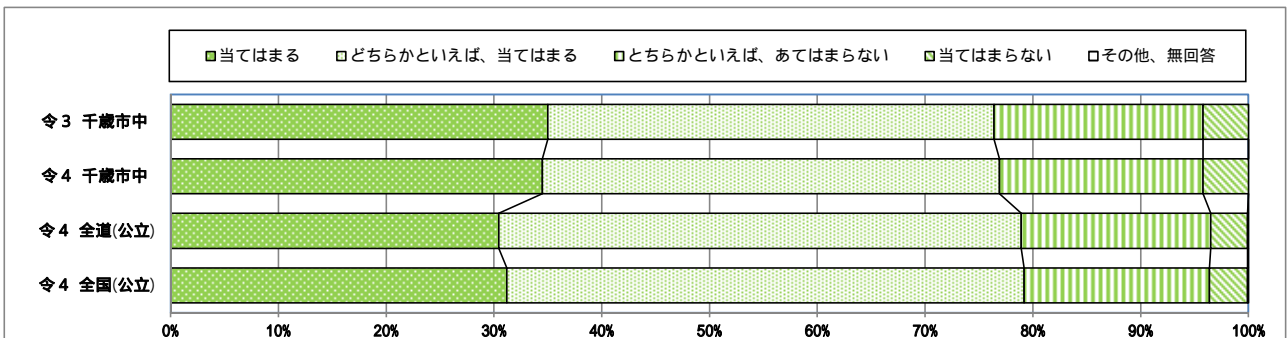




質問番号	質問事項（* 学校質問紙）
23	調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



質問番号	質問事項（* 生徒質問紙）
39	1, 2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。



授業に対する教師と児童・生徒の意識の差をさらなる授業改善に生かしていくことが望まれる

「調査対象学年の児童生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思うか」という質問に対して小学校は前回より 4.0 ポイント増加して 35.3%、中学校は 25.0 ポイント増加して 50.0%であり、いずれも全国（小 19.3%、中 19.2%）を大きく上回る。

児童生徒質問紙の「これまでに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思うか」という質問に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生は前年度より 0.1 ポイント増加して 34.0%、中学生は前回より 0.5 ポイント減少して 34.5%であり、小・中学校ともに全国（小 30.5%、中 31.2%）を上回る。

教師と、指導を受ける児童生徒との意識の差は、小学校は前回より 1.3 ポイント縮まって 1.3 ポイント、中学校は 5.5 ポイント広がって 15.5 ポイントである。

に見られる状況を授業改善に生かすためには、児童生徒による授業評価の実施や評価項目の見直しなど、より一層子ども視点に立った状況分析を行うと同時に、全ての児童生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、児童生徒自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設け、興味・関心を生かした自主的、自発的な学習が促されるよう工夫・改善を行っていく必要がある。

また、「書く」「話す」「発表する」などの発信型の活動に関わらせる授業を構築し、自分の主張が明確に伝わるような話の構成や展開を考える活動、目的に応じ、文章と図表とを結び付けて必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりする活動を各教科の授業に意図的に組み入れることも大切である。